千葉県　八千代市

おおびた遺跡ｂ地点

－公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－

２００９

八千代市教育委員会

千葉県　八千代市

おおびた遺跡ｂ地点

－公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－

２００９

八千代市教育委員会

凡　　例

１．本書は、千葉県八千代市保品に所在する、おおびた遺跡ｂ地点の発掘調査報告書である。
２．調査は、八千代市教育委員会が実施した。
３．調査遺跡の所在地、期間、調査原因等は、下記のとおりである。

遺跡名　　おおびた遺跡（ｂ地点）
所在地　　八千代市保品字須賀1061-１　外
調査期間　1995（平成７）年７月10日～1995（平成７）年８月７日（確認本調査）
調査面積　435㎡
調査原因　八千代市少年自然の家　増築工事

４．整理作業及び報告書作成作業は、2008年８月１日～2009年３月31日までの期間行った。
５．本書の編集・執筆は、１章１，２節を宮澤久史が、その他を伊藤弘一が行い、宮澤が総括した。遺物の写真撮影は高屋麻里子、図版作成の補助は小弓場直子が行った。
６．出土遺物及び実測図等の資料は八千代市教育委員会で保管している。
７．本書、第１図に使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の１地形図『佐倉』を基に作成した。
８．本書、第２図に使用した地形図は、八千代市発行の2,500分の１八千代都市計画基本図（平成13年修正）№７－７、12－１を使用した。
９．各実測図の縮尺については、原則として下記のとおりである。
竪穴住居跡・土坑・土坑墓･･･１/40　堀・土塁･･･１/60　縄文土器・土製品・石製品・弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器･･･１/３
10．本書に使用したスクリーントーン表示は以下のとおりである。

調査区

11．発掘調査及び整理ならびに報告書作成に際しては、関係各機関及びに内外の多くの方々にご指導、ご協力を頂きました。記して深く謝意を表します。（順不同、敬称略）

千葉県教育委員会　八千代市立郷土博物館　齋藤弘道　村田一男　内田武志

目　　次

凡　例
目　次
挿図目次
表　目次

第１章　序　説…… 1
　第１節　調査にいたる経緯…… 1
　第２節　調査の方法と経過…… 1
　第３節　遺跡の位置と歴史的環境…… 1
第２章　調査された遺構と遺物…… 8
　第１節　遺構…… 8
　　１．土坑…… 8
　　２．１号住居跡…… 11
　　３．１号土坑墓…… 16
　　４．堀・土塁…… 16
　第２節　遺構外出土遺物…… 18
　　１．縄文時代…… 18
　　２．弥生時代以降…… 26
第３章　成果と課題…… 29
　第１節　おおびた遺跡ｂ地点の成果…… 29
　第２節　おおびた遺跡の概略…… 32

図　版

挿図目次

第１図　周辺の遺跡…… 3
第２図　周辺の地形図…… 5
第３図　調査範囲及びａ・ｂ地点遺構配置図… 6
第４図　ｂ地点遺構配置図…… 7
第５図　１号土坑実測図…… 9
第６図　２号土坑実測図…… 10
第７図　１号住居跡実測図…… 12
第８・９図　１号住居跡出土遺物図…… 13～14
第10図　１号土坑墓実測図…… 16
第11図　堀・土塁実測図…… 17
第12図　遺構外出土縄文時代早期土器実測図… 19
第13図　遺構外出土縄文時代前期中期
　　土器実測図…… 21
第14図　遺構外出土縄文時代中期後期
　　土器実測図…… 23
第15図　遺構外出土縄文時代石器図…… 25
第16図　遺構外出土弥生時代以降土器実測図… 27
第17図　古墳時代前期住居跡出土遺物図…… 31
第18図　奈良・平安時代土坑墓実測図…… 31
第19図　おおびた遺跡ａ地点出土遺物図…… 34

表目次

第１表　１号土坑出土遺物観察表…… 9
第２表　２号土坑出土遺物観察表…… 10
第３表　１号住居跡出土遺物観察表…… 15
第４表　遺構外出土縄文時代早期遺物観察表… 20
第５表　遺構外出土縄文時代前期・中期
　　遺物観察表…… 22
第６表　遺構外出土縄文時代中期遺物観察表… 24
第７表　遺構外出土縄文時代後期遺物・土製品・
　　石器観察表…… 25
第８表　遺構外出土弥生時代以降遺物観察表… 28

第１章　序　説

第１節　調査にいたる経緯

平成７年度公共事業として、八千代市長から「八千代市少年自然の家」増築工事に伴い、八千代市保品字須賀1061-１外の土地について、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が八千代市教育委員会（以下、「市教委」と略）に提出された。照会地は市遺跡No.86おおびた遺跡の範囲内であり、過去の隣接地及び周辺部での調査の成果から、本照会地においても遺構が検出される可能性が高いと判断し、市教委は、八千代市長に対して、全域「遺跡有り」の回答を行い、建設にあたっては、発掘調査が必要となる旨を伝えた。その後、市教委と関係諸部局の間で発掘調査実施の為の協議が進められ、埋蔵文化財の現状保存は困難との判断に至り、記録保存の措置として、発掘調査を実施することとなった。平成７年６月に土木工事の通知及び発掘調査の通知が提出され、準備の整った平成７年７月10日から発掘調査が開始された。調査は、平成７年度の市費単独の直営調査として実施することになった。

第２節　調査の方法と経過

調査対象面積が600㎡であること、敷地が狭小であること、廃土の処理は場内での処理であったこと、重機の搬入が困難であることから、確認調査は、人力によるトレンチ掘削となった。そして、遺構が検出されたトレンチを適宜、拡張した。結果、本調査対象面積は、435㎡で、竪穴住居跡１軒、土坑３基、溝１条等が検出された。遺物の包含層は検出されなかった。

遺構検出は、ソフトローム層上面で遺構確認作業を行った。検出された遺構については、土層観察用のベルトを適宜設定し覆土除去を行った。調査の進捗にあわせ、写真撮影、図面作成等の記録作業を実施した。撮影には、35㎜モノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを使用した。実測方法としては、平板による測量をおこなった。８月７日に全工程を終了した。

調査風景

第３節　遺跡の位置と歴史的環境

市内は、諸河川の浸食により、南東が高く、北～北東が低くなる台地により形成される。市内の台地は、高位から下総上位面、下総下位面、千葉段丘面のおおむね３枚の段丘面に分けられる。おおびた遺跡の立地する台地（仮称、保品支台）は、W字状に広がる印旛沼の西端にあたり、支谷により東側を開析され、北東方向に張り出している。おおびた遺跡は、立地する台地がほぼ全面、遺跡の範囲内であり、西側の高位段丘面（下総下位面、標高21m前後）と東側の低位段丘面（千葉段丘面、標高15m前後）に区分でき、南側の台地縁辺に近くなるに従い段丘面の間の傾斜は緩くなる。おおびた遺跡に関連する時

代の遺跡を概観する。

集落　**弥生時代中期**　中期前半は沖塚遺跡[34]で、人々の活動の痕跡を垣間見ることができる。遺構に伴わず一個体分の土器が出土し、それには補修孔も認められ、神奈川県三浦半島城ケ島で出土した土器との共通性が指摘されている[註1]。中期後半には、田原窪遺跡[19]で環濠集落が調査された。上谷遺跡[4]では住居跡、逆水遺跡[11]では方形周溝墓、栗谷遺跡[3]では住居跡・方形周溝墓が検出された。**弥生時代後期～古墳時代**　中期に比べ遺跡数は増加する。また、A.［弥生後期から古墳時代前期まで継続する集落］と、B.［弥生後期から古墳時代後期まで継続する集落］の２つ傾向が大きく捉えられる。保品地区では上谷遺跡が古墳時代中期まで、栗谷遺跡が古墳時代後期まで連綿と続く。Aは役山東[5]・雷[6]遺跡が、Bは境堀[7]・向境[8]遺跡が相当する。佐山地区は、間見穴遺跡[17]でAの傾向を、道地[18]、松原[22]遺跡でBの傾向を示し、瓜ヶ作遺跡[23]で弥生後期の住居跡、田原窪[19]、佐山台[20]、真木野向山[21]の各遺跡で古墳前期の住居跡が検出されている。萱田地区では上ノ山遺跡[30]が弥生後期のみの住居跡を検出し、ヲサル山[25]、井戸向[27]でAの遺構変遷を見せ、Bとしては権現後[24]、北海道[26]、川崎山[29]遺跡があげられ、いずれも古墳中期の石製模造品工房が認められる。白幡前遺跡[28]は弥生後期のあと、古墳後期まで遺構がみられない。村上地区では、村上込の内遺跡[31]で、弥生時代後期と古墳時代後期の遺構を検出。浅間内遺跡[32]は、Bの変遷状況である。高津地区では、内込遺跡[36]で古墳時代後期住居跡、大和田地区の小板橋遺跡[35]は古墳中期末～後期初頭の石製模造品工房、勝田地区では、勝田大作遺跡[37]で古墳時代前期・後期の住居跡を検出している。沖塚遺跡[34]では古墳時代初頭の住居内から精錬炉を確認し、精錬－鍛錬作業を行っていたことが分かる。おおびた遺跡北西対岸の印西市船尾地区では、船尾町田[37]、船尾白幡[38]遺跡でBの傾向を示す遺構が検出された。油免遺跡[39]は、古墳中期から後期の遺構が調査されている。おおびた遺跡北方対岸の印西市松崎地区では松崎Ⅰ[40]、松崎Ⅱ[41]遺跡においてAの動向を見せる。おおびた遺跡北東の印旛村吉田地区では、馬々台[42]、トヶ前[43]遺跡でAの遺構検出状況が認められる。佐倉市先崎地区の先崎西原遺跡[12]は、Bの変遷状況が見られ、ガラス小玉が多量に出土した遺構から工房の存在が窺える。下志津地区周辺の上座矢橋[44]、飯合作[45]、臼井南遺跡群[46]ではBの遺構動向を追うことができる。

墳墓　**弥生中期末～後期初頭**には境堀遺跡[7]で土器棺墓が見られる。**弥生後期**は栗谷遺跡[3]で、方形周溝墓と土器棺墓を検出。**古墳時代前期**には、前方後方墳としての可能性が指摘される間見穴002号墳[17]と浅間内古墳[32]が造営される。間見穴古墳群は、前期と後期に形成される。対岸の松崎Ⅰ遺跡[40]では集落内に７基の方墳を確認。**中期**には、神野芝山古墳群[10]が形成され後期まで続く。神野芝山４号墳は、（推定）直径40mの円墳で、主体部は粘土郭であったとされ、刀子・鏡・石枕・玉類・埴輪片などが出土。**後期**には箱形石棺のみの調査だが円墳と想定される栗谷古墳[9]から直刀・鉄族・刀子などが出土。神野芝山２号墳は、直径30mの円墳。雲母片岩を使用した箱形石棺から、人骨８体分と鉄鏃・装飾品などが出土。男性４体については血縁関係が認められ、その中から「塗朱」された頭蓋骨が検出された。下高野新山古墳[14]は、およそ23mの規模を持つ円墳か方墳。時期不明。

中世　おおびた遺跡の立地する台地上の南東には、保品竜害城跡[2]が確認され、台地の南東端に土塁が約20m残る。先崎地区には先崎城跡[13]があり、調査から城域西端部の土塁２条、溝状遺構２条が検出された。また東西に伸びる台地基部に、土塁で囲われた一画が視認できる下高野館跡[14]がある。

（註１）加藤修司　2008「第２編第３章」『八千代市の歴史　通史編　上』八千代市史編纂委員会　他遺跡調査会調査報告書等で報告
（２）道上　文　2008「第３編第７章」『八千代市の歴史　通史編　上』八千代市史編纂委員会
（３）八千代市遺跡調査会　2004『千葉県八千代市　栗谷遺跡　第１、２、３分冊』
（４）八千代市遺跡調査会　2004『千葉県八千代市　上谷遺跡　第１、２、３、４、５分冊』
（５）八千代市遺跡調査会　2004『千葉県八千代市　栗谷遺跡　役山東遺跡　雷南遺跡　雷遺跡』

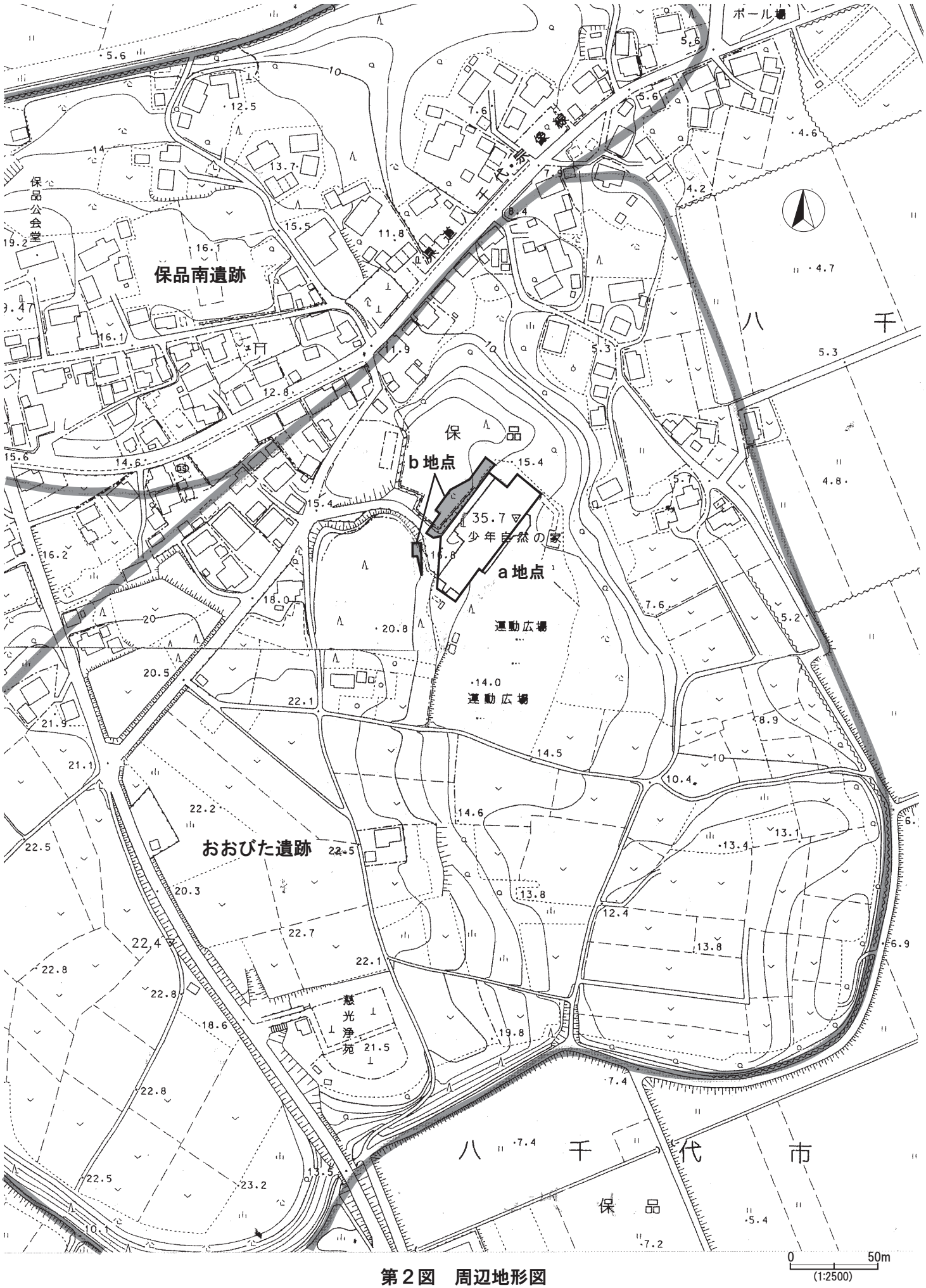
●=集落遺跡　■=墳墓等を含むか隣接する集落遺跡

S＝1/50,000

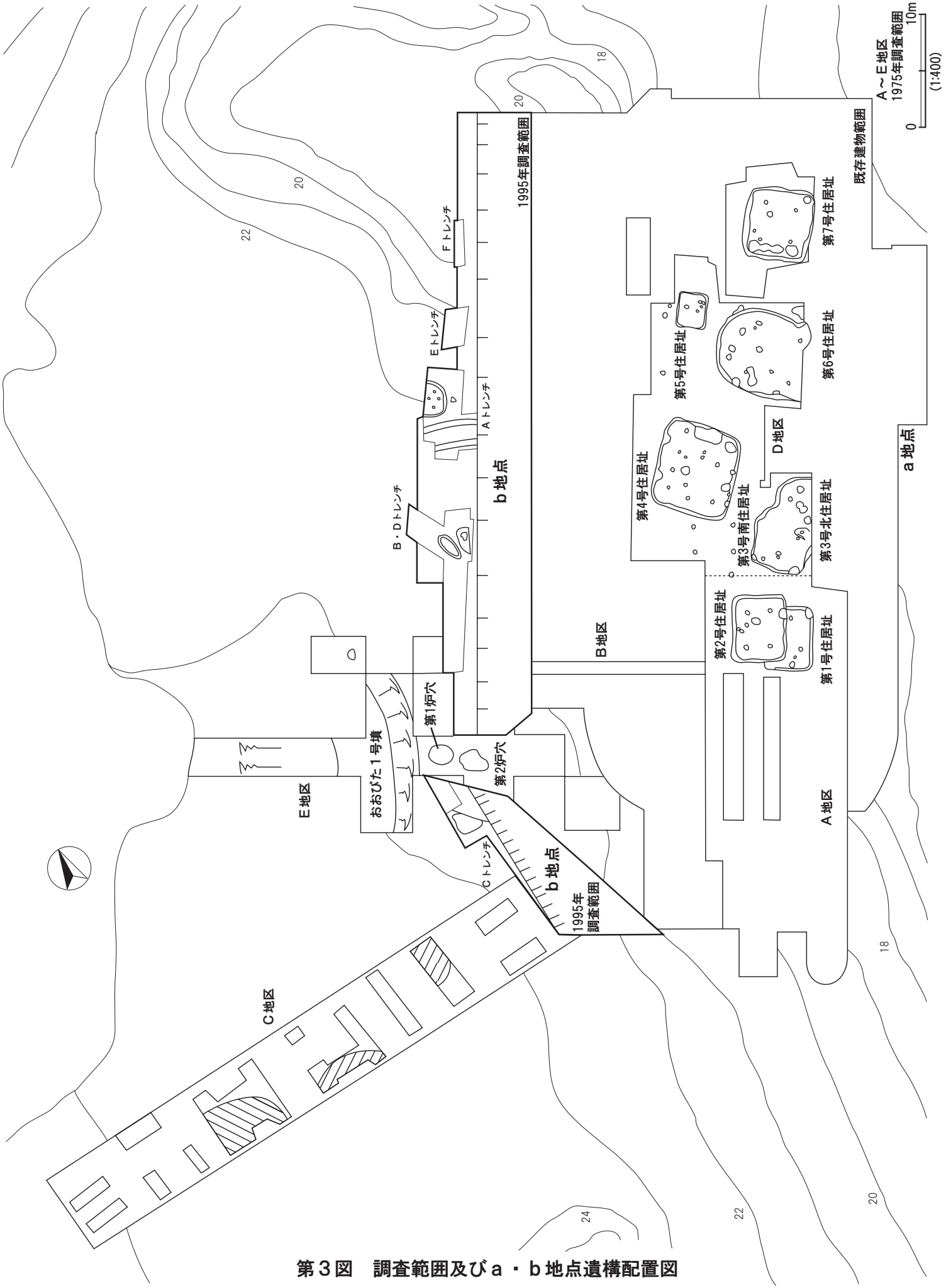
1.おおびた遺跡　2.保品竜害城跡　3.栗谷遺跡　4.上谷遺跡　5.役山東遺跡　6.雷遺跡　7.境堀遺跡
8.向境遺跡　9.栗谷古墳　10.神野芝山古墳群　11.逆水遺跡　12.先崎西原遺跡　13.先崎城跡　14.下高野館跡
15.下高野新山古墳　16.平戸台古墳群　17.間見穴遺跡　18.道地遺跡　19.田原窪遺跡　20.佐山台遺跡　21.真木野向山遺跡
22.松原遺跡　23.瓜ヶ作遺跡　24.権現後遺跡　25.ヲサル山遺跡　26.北海道遺跡　27.井戸向遺跡　28.白幡前遺跡
29.川崎山遺跡　30.上ノ山遺跡　31.村上込の内遺跡　32.浅間内遺跡　33.沖塚遺跡　34.小板橋遺跡　35.内込遺跡
36.勝田大作遺跡　37.船尾白幡遺跡　38.船尾町田遺跡　39.油免遺跡　40.松崎Ⅰ遺跡　41.松崎Ⅱ遺跡　42.吉田馬々台遺跡
43.トヶ前遺跡　44.上座矢橋遺跡　45.飯合作遺跡　46.臼井南遺跡群

第１図　周辺の遺跡

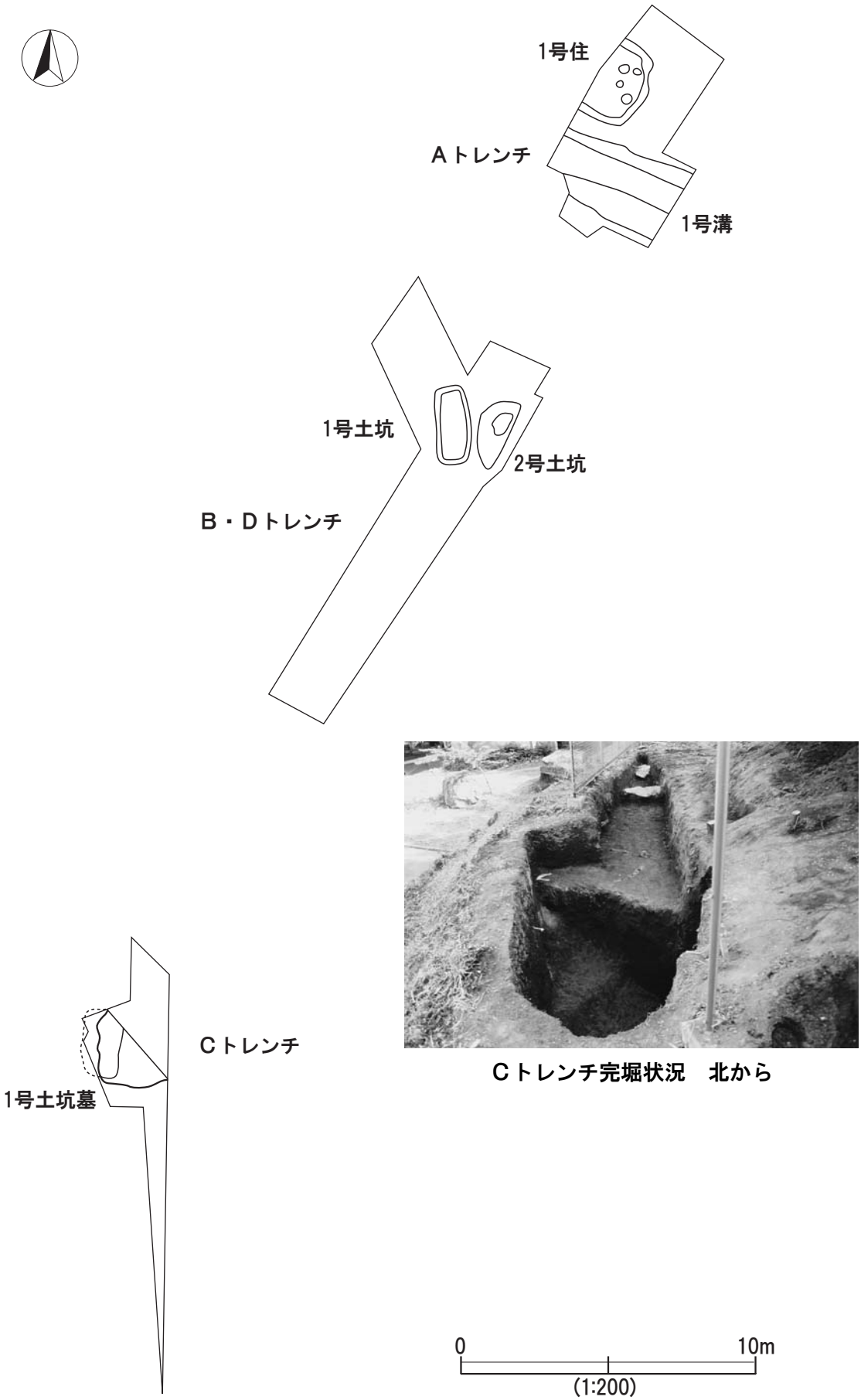
（６）八千代市遺跡調査会　2004『千葉県八千代市　栗谷遺跡　役山東遺跡　雷南遺跡　雷遺跡』
（７）八千代市遺跡調査会　2004『千葉県八千代市　向境遺跡』
（８）八千代市遺跡調査会　2005『千葉県八千代市　境堀遺跡』
（９）大川　清　1953「千葉県印旛郡阿蘇村栗谷古墳」『古代』第11号
(10) 加藤　修司　2008「第２編第３章」『八千代市の歴史　通史編　上』八千代市史編纂委員会　他『八千代市の歴史　資料編』で報告
(11) 八千代市教育委員会　2008『千葉県八千代市　不特定遺跡発掘調査報告書Ｖ』他市内遺跡調査報告書で報告
(12) (財)印旛郡市文化財センター　2001『千葉県佐倉市　先崎西原遺跡』
(13) (財)印旛郡市文化財センター　2006『千葉県佐倉市　先崎城跡』
(14) 道上　文　2008「第３編第７章」『八千代市の歴史　通史編　上』八千代市史編纂委員会
(15) 八千代市教育委員会　1987『千葉県八千代市　埋蔵文化財発掘調査報告書集　３.下高野新山古墳』
(16) 八千代市教育委員会　2001『千葉県八千代市　平戸台２号墳』
(17) (財)千葉県文化財センター　2003『船橋印西線文化財調査報告書３－八千代市間 見穴遺跡－』
(18) (財)千葉県文化財センター　2004『船橋印西線文化財調査報告書２－八千代市道 地遺跡－』
(19) 八千代市教育委員会　1995『平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
(20) 八千代市教育委員会　1995『平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
(21) 八千代市教育委員会　1995『平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
(22) 八千代市教育委員会　1995『平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
(23) 八千代市教育委員会　1995『平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
(24) 八千代市教育委員会　1995『平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
(25) (財)千葉県文化財センター　1986『八千代市ヲサル山遺跡』
(26) (財)千葉県文化財センター　1985『八千代市北海道山遺跡』
(27) (財)千葉県文化財センター　1987『八千代市井戸向遺跡』
(28) (財)千葉県文化財センター　1991『八千代市白幡前遺跡』
(29) 八千代市教育委員会　2008『川崎山遺跡ｎ地点発掘調査報告書』　他市内遺跡調査報告書等で報告
(30) 八千代市遺跡調査会　2008『千葉県八千代市　上ノ山遺跡発掘調査報告書』　他遺跡調査会調査報告書で報告
(31) (財)千葉県都市公社　1974『八千代市村上遺跡群』
(32) 八千代市遺跡調査会　2007『千葉県八千代市　浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡』　他遺跡調査会等で報告
(33) (財)千葉県文化財センター　1994『八千代市沖塚・上ノ台遺跡』
(34) 八千代市遺跡調査会　2008『千葉県八千代市　小板橋遺跡―ｂ地点埋蔵文化財発掘調査報告書』
(35) 八千代市遺跡調査会　2003『千葉県八千代市　内込遺跡ｂ地点』　他遺跡調査会報告書で報告
(36) 八千代市遺跡調査会　2007『千葉県八千代市　勝田大作遺跡』　他遺跡調査会報告書で報告
(37) (財)千葉県文化財センター　2004『千葉県ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ｘ Ⅵ－印西市船尾白幡遺跡―』
(38) (財) 千葉県文化財センター　1984『千葉県ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ　船尾町田遺跡　谷田木曾地遺跡　谷田神楽場遺跡』
(39) (財)印旛郡市文化財センター　2004『千葉県印西市　油免遺跡（第２地点）』
(40) (財)千葉県文化財センター　2004『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文 化財調査報告書２－松崎Ⅰ遺跡－』
(41) (財)千葉県文化財センター　2003『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文 化財調査報告書１－松崎Ⅱ遺跡－』
(42) 印旛村教育委員会　1988『吉田馬々遺跡』
(43) (財)印旛郡市文化財センター　1988『トヶ前遺跡発掘報告書』
(44) 印旛考古資料刊行会　1986『千葉県佐倉市第２ユーカリヶ丘宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書　上座矢橋遺跡』
(45) (財)千葉県文化財センター　1978『佐倉市飯合作遺跡』
(46) 佐倉市教育委員会　1975『臼井南ー千葉県佐倉市臼井南遺跡調査報告書－』


保品南遺跡
おおびた遺跡
b地点
a地点
保品公会堂
少年自然の家
運動広場
慈光浄苑
八千代市
保品
0
50m
(1:2500)

第２図　周辺地形図



第３図　調査範囲及びａ・ｂ地点遺構配置図



Cトレンチ完堀状況　北から

第４図　ｂ地点遺構配置図

第２章　調査された遺構と遺物

第１節　遺　構

今回の調査では、土坑２基、竪穴住居跡１軒、土坑墓１基、溝１条、土塁１条が検出された。1975年におけるａ地点の本調査では、縄文時代炉穴１基、弥生時代後期住居跡１軒、古墳時代前期住居跡６軒、円墳１基、土坑１基が報告されている[(1)]。同時に、トレンチによる確認調査においても弥生時代後期と想定される３軒の住居跡が認められている。おおびた遺跡は、22m前後の高い段丘面と東側の14m前後の低い段丘面の二段からなる段丘面に遺構が分布しており、調査の実施された範囲は、高い段丘面、低い段丘面がひとつになり北に傾斜する変化点に立地している。印旛沼に向かい北東方向に張り出す舌状台地におおびた遺跡は展開しており、ａ、ｂ地点以外の周辺にも遺構は密に存在している。

調査は、任意の地点にトレンチを配し、遺構が認められた部分を適宜拡張する方法がとられた。遺構の標高に関しては、調査時の記録に不備があったための記載できない。調査記録の断片、地形図のなどから20～21m前後の高さに遺構は展開していた状況である。

縄文時代中期阿玉台期の土器に関しては、篠原正氏（1978年）の分類を参考として記載する[(2)]。

遺物の出土地点の高さは、図面、写真等を検討の上、相対的な高さとして表記する。

１．土坑

１号土坑　（第５図、第１表）

検出状況　調査区中央、Ｂ・Ｄトレンチの拡張地点に位置する。高い段丘面から東へ斜面の角度を変える縁辺に位置し、ａ地点の土坑、炉穴と同じくらいの標高を測る。等高線に対してはやや平行する長軸方向。重複関係　単独。完掘する。

平面形・規模　上部、底部ともにいびつな長方形を呈する。2.68m×1.21m×深さ0.40～0.50mの規模。

長軸・壁面　ほぼ北－南。壁面は垂直に近く立ちあがる。底面はほぼ平坦。

覆土の状況　４層に分層できる。暗褐色土主体で一部ロームブロックが入る。粘性･しまり共になく、全体に均質な土質。短期間で埋まった人為的堆積か。

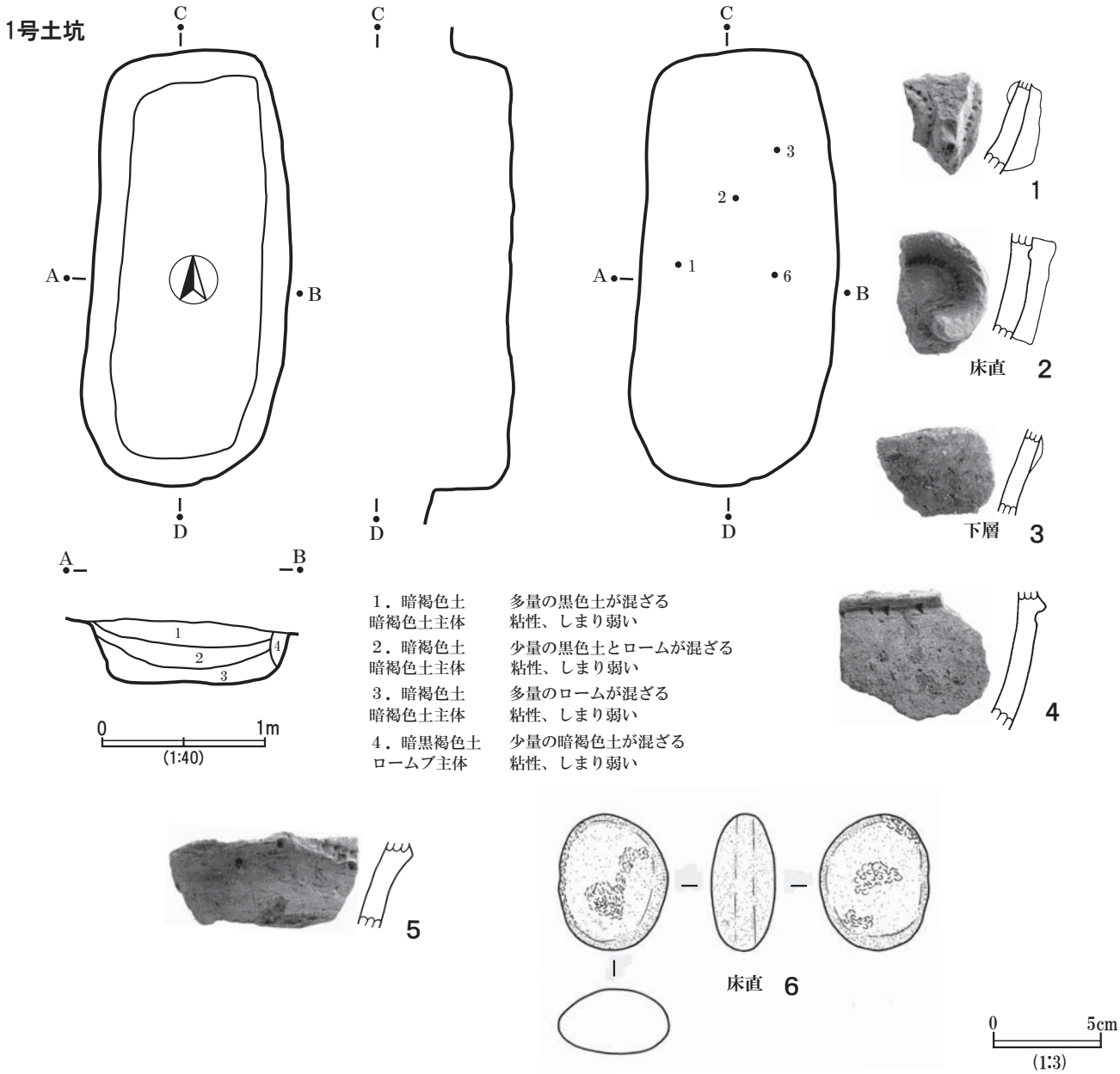
出土遺物　覆土上層～下層にかけて小破片が散漫と出土する状況。おもに縄文中期阿玉台式の遺物（65点）が出土し縄文早期条痕文期の土器（18点）が次ぐ。口縁部に近い部分の遺物を図示した。床面直上の遺物は、２、６である。２は、中期阿玉台Ｉｂ式土器。口辺部付近の隆線で円形の区画を構成する。６は、磨石か。全体に平滑で部分的にくぼむ。下層出土の３は、横位に弱い隆線がめぐり、ひだ状をの器面で、金雲母の混入が目立つ。他の出土遺物としては弥生土器（16点）土師器（14点）が出土している。

時期・性格　阿玉台式期の土坑墓と考えられる。

２号土坑　（第６図、第２表）

検出状況　調査区中央、Ｂ・Ｄトレンチの拡張地点に位置する。平坦面から斜面へ角度を変える縁辺に位置し、ａ地点の土坑、炉穴と同じくらいの標高を測る。等高線に対しては平行する長軸方向。重複関係　単独。１／２の検出

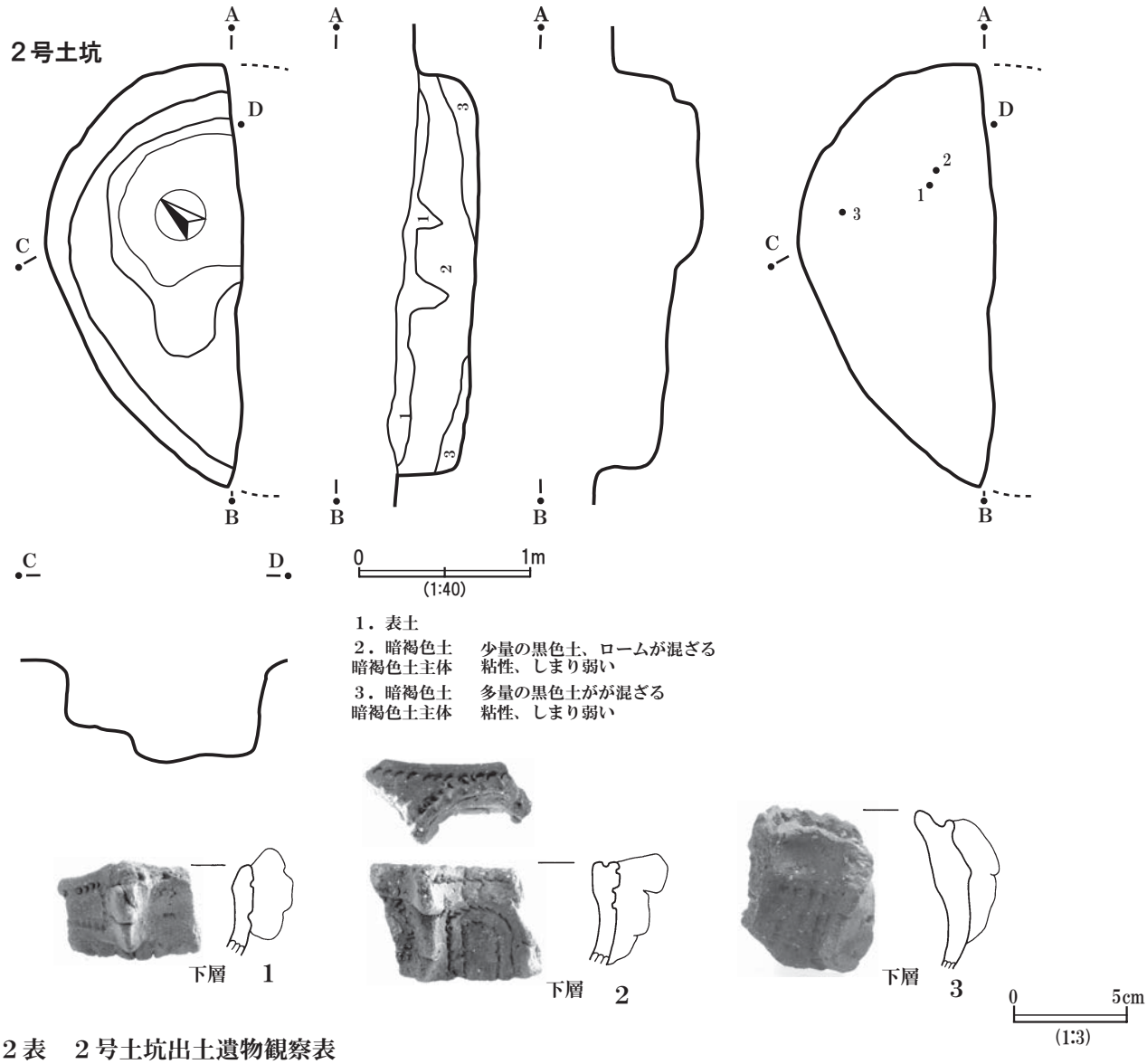
平面形・規模　上部、底部ともにいびつな長楕円形を呈する。　2.50m×（1.18m）×深さ0.50mの規模。底面北半分で楕円形に15㎝程度低くなる部分がある。



第1表　1号土坑出土遺物観察表

No.	器種	遺存度	色調	胎土	焼成	文様・調整等の特徴	備考
1	縄文深鉢	胴部片	燈褐色	長石少 雲母微	普	外面　縦位の隆線を付す。隆線に沿うように2列の角押文を施す。 内面　隆線を横位にめぐらす。ナデ。	中期 阿玉台Ｉb式 1P　一括
2	縄文深鉢	胴部片	暗褐色	長石多 石英少 雲母微	普	外面　口辺部付近隆線で丸い円形の区画を描く。沿うように1列の角押文を施す。 内面　ナデ。	中期 阿玉台Ｉb式 1P　6　床直
3	縄文深鉢	胴部片	暗褐色	雲母多 長石多	普	外面　横位に弱い隆線をめぐらす。 内面　ナデ。	中期 阿玉台Ｉb式 1P　16　下層
4	縄文深鉢	胴部片	燈褐色	長石多 石英少 雲母微	普	外面　口辺部付近に横位の稜がめぐる。稜の上下に角押文を施す。 内面　ヨコナデ。	中期 阿玉台Ｉb式 1P　10
5	縄文深鉢	胴部片	暗褐色	雲母少 石英微	普	外面　口辺部付近1列の角押文。口縁直下波状の稜がめぐる。ヨコナデ。 内面　ナデ。	中期 阿玉台Ｉb式 1P　一括
6	縄文石器	磨石完形	－	－	－	石材砂岩 長さ　5.5cm×幅5.0cm×2.9cm　重さ120g 表面、裏面ともに中央付近に窪みが認められる。側面にも部分的に使用が認められる。	中期 阿玉台式期か 1P　8　床直

第５図　１号土坑実測図



第２表　２号土坑出土遺物観察表

No.	器種	遺存度	色 調	胎 土	焼成	文様・調整等の特徴	備 考
1	縄文 深鉢	口縁部片	暗茶褐色	長石多	普	口縁は平縁　角頭状。 外面　口縁下に縦位の突起を付す。突起を起点に角押文で四角い区画を描く。 内面　横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉb式 ２Ｐ14下層
2	縄文 深鉢	口縁部片	黒色	金雲母多 石英少	普	口縁は平縁　平頭状。 外面　口唇端部に刻み目。刻み目直下角押文を施す。縦位の突起を付す。 突起を起点に隆線で区画を描く。区画内には２列の角押文を施す。 内面　ヨコナデ。	中期 阿玉台Ｉb式 ２Ｐ16 下層
3	縄文 深鉢	口縁部片	暗褐色	雲母多 長石多 石英多	良	口縁は平縁　平頭状。 外面　扇状突起に縦位の突起を垂下させ隆線によって区画を描く。区画内には４列の角押文を施す。 内面　ナデ。	中期 阿玉台Ｉb式 ２Ｐ9 下層

第６図　２号土坑実測図

長軸・壁面　北東－南西か。壁面はほぼ垂直に立ちあがる。底面は、ほぼ平坦。

覆土の状況　３層に分層できる。暗褐色土主体で黒色土が入る。粘性・しまり共になく、自然堆積である。

出土遺物　覆土上層～下層にかけて小破片が散漫と出土する状況。おもに縄文中期阿玉台式の遺物（72点）が出土し縄文早期条痕文期の土器（７点）が次ぐ。遺物の出土傾向は１号土坑と同様の傾向を示す。中期阿玉台式土器の深鉢口縁片を図示した。１、２、３はいずれも覆土下層出土の阿玉台Ｉｂ式土器。どれもが突起部の粘土棒の芯は、外側から見ることはできず、芯を囲む粘度帯と一体である。

時期・性格　遺構は、阿玉台式期特有のタライ状の形状を呈し、阿玉台式期に想定される。性格については、土坑墓か。

２．１号住居跡　（第７・８・９図、第３表）

検出状況　調査区中央、Ａトレンチの拡張地点で高位、段丘面縁辺に位置する。６ｍ程低いａ地点の段丘面には、弥生時代後期と古墳時代前期の住居跡が分布している。重複関係　堀・土塁に壊される。全体のおよそ１／２を検出し、調査区域外に延びる。

平面形・規模　いびつな正方形を呈する。長辺2.80ｍ×(短辺1.80ｍ)×深さ0.20ｍの規模。周溝は0.20～0.30ｍの幅を持ち全周する。周溝の深さは、平均0.10ｍを測る。住居内の東隅から４本の柱穴が確認された。柱穴の並びは不規則。主柱穴、補助柱穴の区別は明確につけられない。平面形はＰ１、Ｐ４でいびつな長楕円形、Ｐ２、Ｐ３は､いびつな円形である。深さは、いずれも0.20～0.30ｍ。ピット平面　Ｐ１　0.30ｍ×0.20ｍ、Ｐ２　0.32ｍ×0.30ｍ、Ｐ３　0.21ｍ×0.20ｍ、Ｐ４　0.32ｍ×0.30ｍ。炉は確認できず。

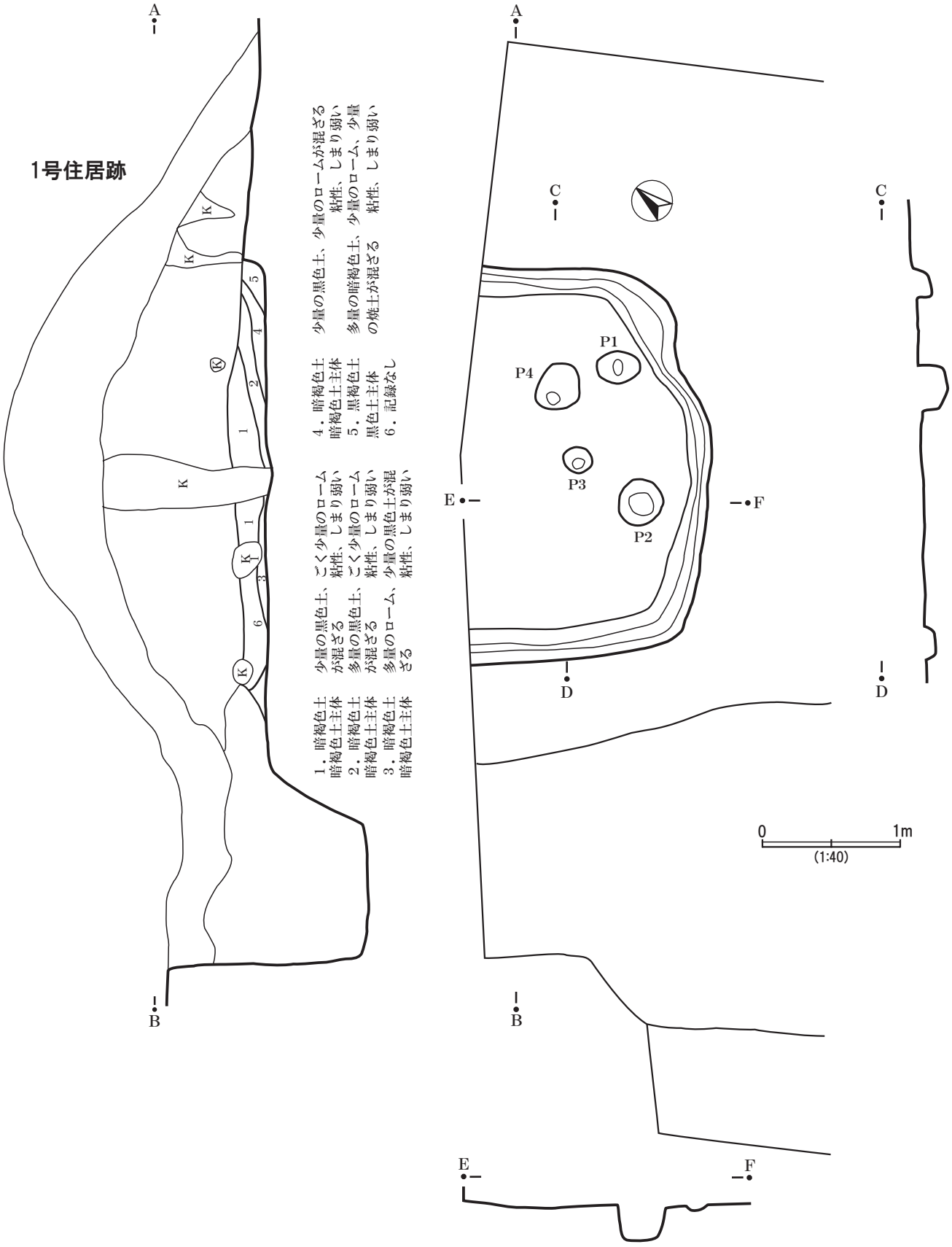
長軸・壁面　北西から南東か？住居の壁面は土層断面から、ほぼ垂直に立ちあがる。それぞれの柱穴も、底面はほぼ平坦で垂直に立ちあがる。

覆土の状況　５層に分層できる。暗褐色土主体。土質は全体に粘性、しまり共に弱い。５層に焼土が混入する。いずれの柱穴も覆土は黒色土が主体をなす。焼土の混入から焼失住居の可能性が考えられる。人為的堆積か。

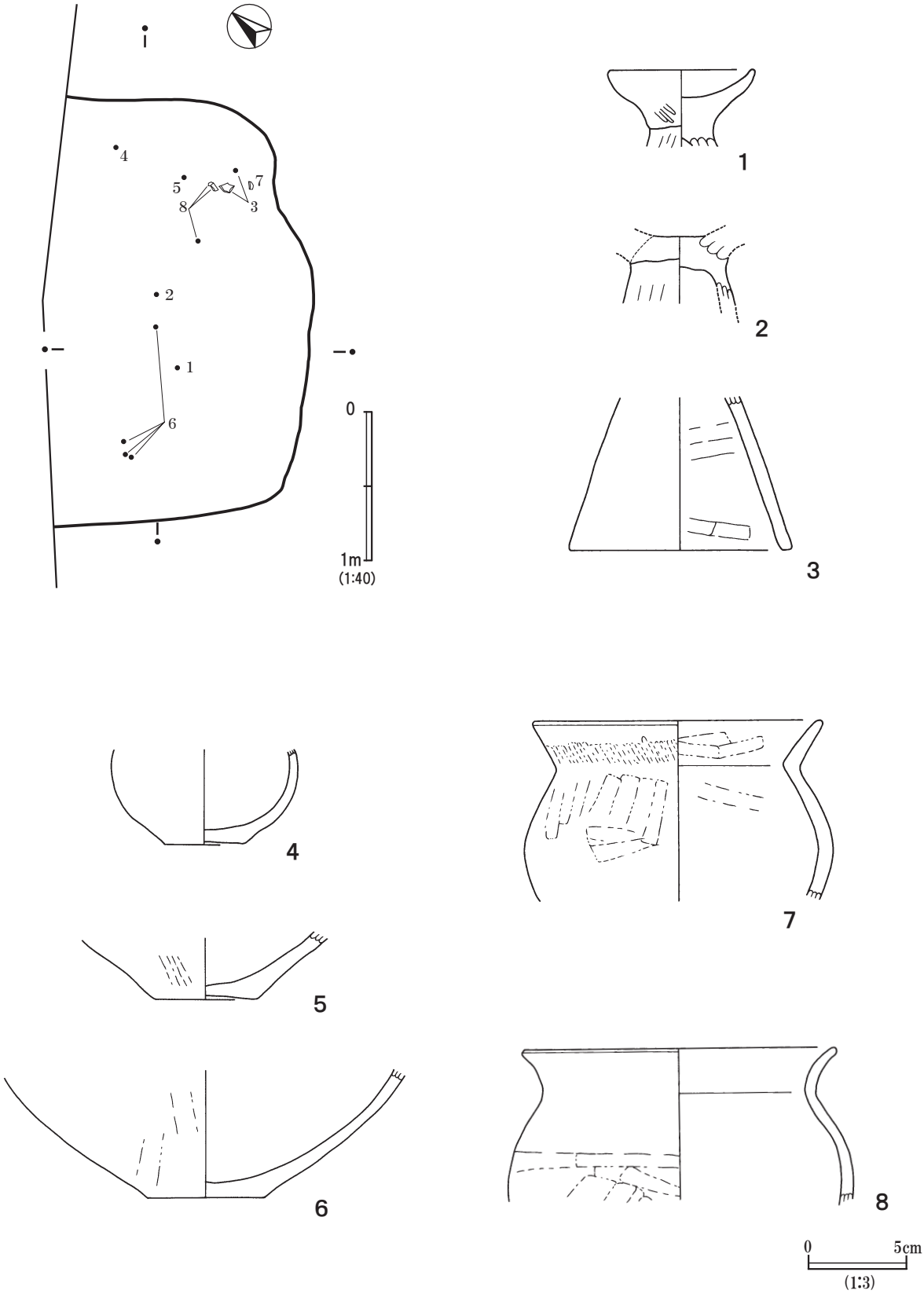
出土遺物　住居範囲全般に広がり、覆土上層～下層にかけて出土する状況。種別は、条痕文214点、阿玉台281点、堀之内38点、黒曜石４点、弥生５点、土師器190点が認められた。

土師器ついては、大小破片があり、テン箱１箱分の分量がある。

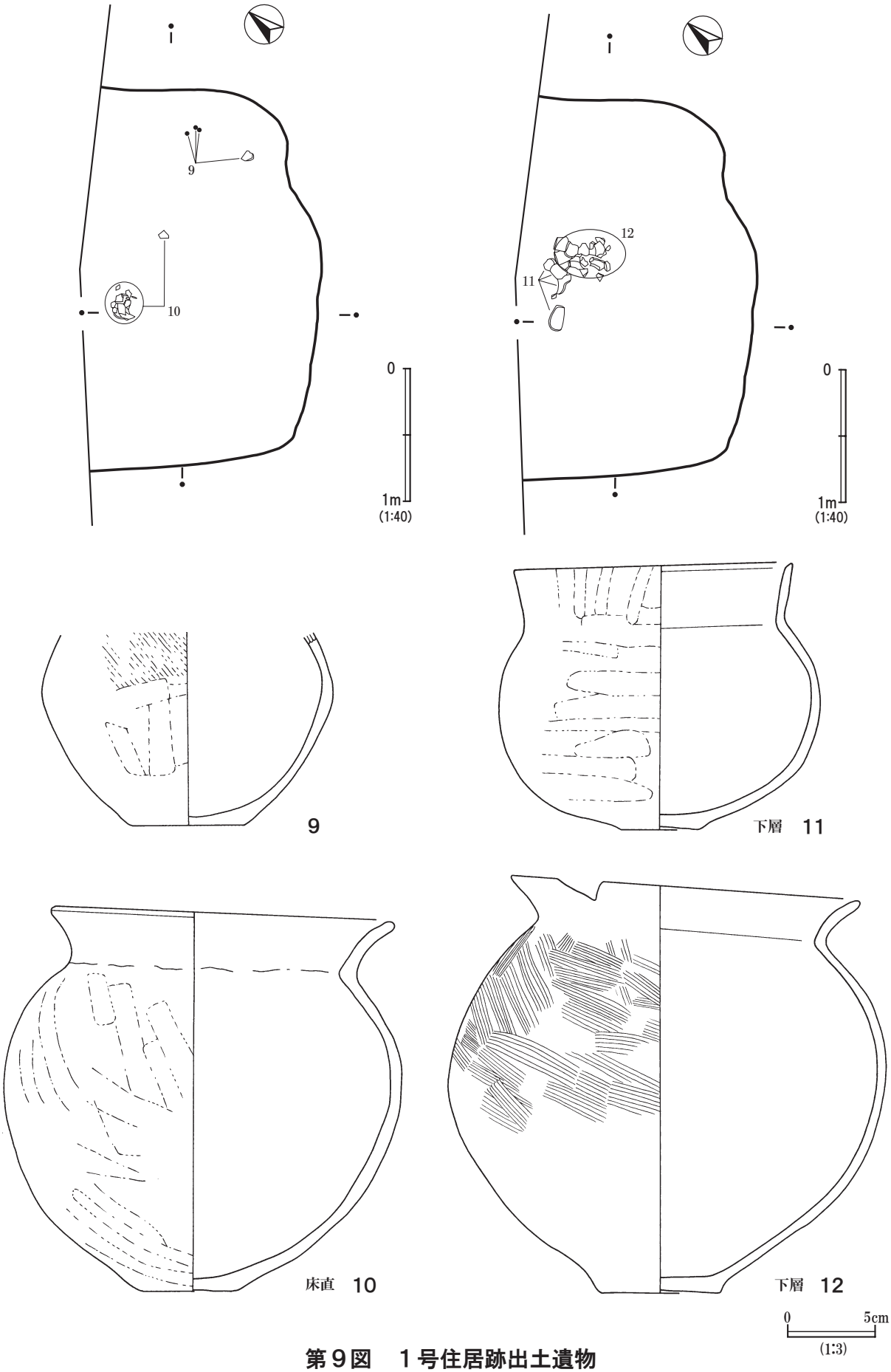
遺構から土師器の小型器台・台付甕・鉢・平底甕が出土している。小さい遺物に関しては、住居内に散在し覆土上層～中層の高さで出土するが、大きい遺物は、住居中央の下層に集中する。１、小型器台は受け部口縁外形が若干の丸みを帯びる。裾部については不明。３、台付甕台部のみの出土。甕の部分とは接合せず。台部は直線的だがそれほど外側へ広がらない形態。覆土上層。４、半球形の鉢。口縁部は接合せず。７と８、小型甕口縁部、器面の調整はヘラケズリ。７は、頸部がくの字に屈曲する。８の頸部は、屈曲せず緩やかである。口唇部に刻み目は見られない。覆土中層。11、ヘラケズリの平底甕。頸部は屈曲せず直立に近い角度をみせる。12、ハケ調整の平底甕。頸部は、屈曲し胴部中位に最大径がある。11・12、ともに口唇部に刻み目は見られず、住居下層から出土。10、ヘラケズリの平底甕。頸部は屈曲し、胴部中位に最大径がある。口唇部に刻み



第７図　１号住居跡実測図



第８図　１号住居跡出土遺物



第９図　１号住居跡出土遺物

目は見られず。住居床面直上。

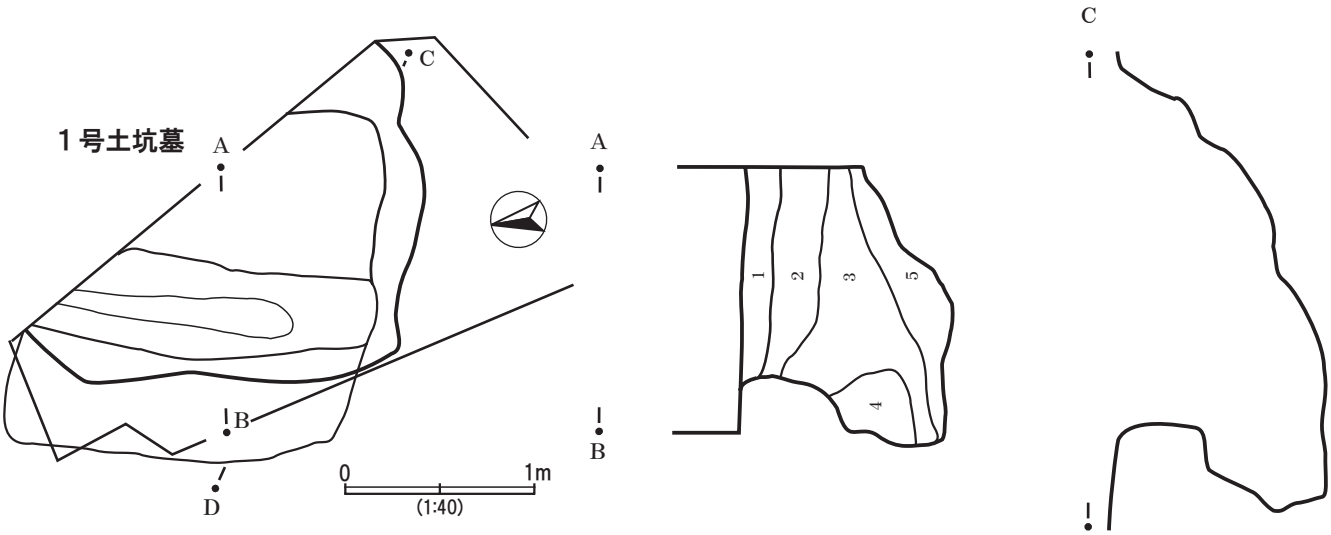
10・11のような弱いヘラケズリ調整の甕は、ａ地点の調査においても認められた。12のハケ調整甕は、部分的にハケ目をすり消す痕跡が確認できる。ａ地点の調査の１・２号住居跡出土の土器おいても同様の甕は、荒いハケ目甕として報告されている。

10・11・12は、住居中央部分に集中して分布している。柱穴を避けて、直線的に配列されていた状況も考えられる。住居廃絶時に意図的に廃棄している可能性が指摘できる。出土した遺物は、いずれにおいても二次焼成は認められなかった。１号住居跡に対応する時期の周辺の調査事例をみると、①接合する個体が住居内下層（床直）で意図的にある部分に集中して出土する遺構、②接合する個体が住居内下層（床直）に散在する遺構に大きく分けられ、類型化できる。

時期・性格　　遺構は、古墳時代前期と考えられる。

第3表　1号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色 調	胎 土	焼成	文様・調整等の特徴	備 考
1	土師器 小型器台	器高 (3.3)	頸部片	褐色	長石少 雲母微	良	器台受部割れ口に擦ったような痕跡。 外面　胴部上半縦位ヘラケズリ。 内面　胴部上半横位ヘラケズリ。	古墳 前期 2D内
2	土師器 小型器台	口径　7.3 器高 (3.7)	1/3 口縁部～ 頸部片	淡燈褐色	石英微	良	外面　口縁横ナデ　頸部上半斜位ヘラミガキ。 内面　口縁横ナデ。	古墳 前期 2D内
3	土師器 台付甕 (台部)	底径 11.2 器高 (7.5) 器厚　0.6	体部片	燈褐色	長石少	普	外面　胴部下半縦位ヘラケズリ→横ナデ。 内面　胴部下半横位ヘラナデ　下端横位ヘラケズリ。	古墳 前期 2D内
4	土師器 (小型)甕	底径　4.0 器高 (4.7) 最大径　9.4	2/3 胴部～ 底部片	外面 淡褐色 内面 淡燈褐色	長石多	普	外面　胴部下半斜位ヘラケズリ→横ナデ。 底部全体多方向ヘラケズリ。 内面　胴部下半ヘラナデ→ナデ。	古墳 前期 2D内
5	土師器 甕	底径　5.0 器高 (3.0) 器厚　0.7	底部片	淡燈褐色	赤色スコリア少	普	外面　胴部下端縦位ヘラケズリ　底部多方向ヘラケズリ。 内面　胴部下端縦位ヘラケズリ　落剥が著しい。	古墳 前期 2D内
6	土師器 甕	底径　6.0 器高 (6.0) 器厚　0.6	1/3 底部片	暗茶褐色	長石多	普	外面　縦位ヘラケズリ→ナデ　底部多方向ヘラミガキ。 内面　落剥が著しい。	古墳 前期 2D内
7	土師器 甕	口径 14.6 器高 (8.9) 底径 15.4	口縁部片	外面 黒褐色 内面 淡褐色	長石多 赤色スコリア微	普	胴部中央に最大径がある 外面　頸部縦位ヘラケズリ→横ナデ　胴部上半中位縦位ヘラケズリ。 内面　頸部横位ヘラケズリ→横ナデ 胴部上半中位横位ヘラケズリ→ヘラミガキか？ 落剥が著しい。	古墳 前期 2D内
8	土師器 甕	口径 15.8 器高 (7.5) 底径 17.2	口縁部～ 胴部片	外面 淡褐色 内面 赤褐色	長石多 雲母微	良	胴部中央に最大径がある。 外面　口縁・頸部横ナデ 胴部上半中位横位ヘラケズリ→横ナデ。 内面　口縁・頸部横ナデ 胴部上半中位横位ヘラケズリ→横ナデ。	古墳 前期 2D内
9	土師器 甕	底径　6.4 器高 10.8 最大径 16.4	胴部～ 底部片	外面 黒褐色 内面 黒褐色	赤色スコリア微	普	胴部中位に最大径がある。 外面　胴部中位縦位ヘラケズリ→ヘラミガキ 下半縦位ヘラケズリ　底部多方向ヘラミガキ。 内面　落剥が著しい。	古墳 前期 2D内
10	土師器 甕	口径 19.2 底径　5.3 器高 21.2	4/5	外面 黒褐色 内面 淡褐色	長石微 石英微 砂粒多	普	中心軸が右にズレる　胴部中央やや上よりに最大径がある。 頸部接合後横ナデ→狭い単位で縦ヘラケズリ。 外面　口縁横ナデ　胴部斜位ヘラケズリ 底部多方向なヘラケズリ。 内面　口縁横ナデ　胴部輪積み痕あり　落剥が著しい。	古墳 前期 2D内 下層
11	土師器 甕	口径 15.5 底径　4.8 器高 14.8 最大径 18.0	略完形	赤褐色 部分的に黒色	長石	良	胴部中央に最大径がある　口縁は歪む　赤彩される。 外面　口縁縦位ヘラケズリ　頸部～胴部横位ヘラケズリ。 内面　口縁横位ヘラケズリ　胴部ヘラケズリか？ 落剥が著しい。	古墳 前期 2D内 下層
12	土師器 甕	口径　19.8 底径　6.6 器高　22.8 最大径　24.0	2/3	全体 暗褐色 外面 暗褐色 内面 赤褐色	赤色スコリア	普	胴部中央に最大径がある　口縁は歪む。 外面　口縁～頸部横ナデ 胴部斜位のハケ目　部分によってはハケ目をすり消す ハケ目の上に粘土を貼りすり消す。 内面　口縁～頸部横位ハケ目　落剥が著しい。	古墳 前期 2D内 下層



1．暗褐色土 暗褐色土主体	多量の黒色土、少量のロームが混ざる 粘性、しまり弱い	4．暗黒褐色土 ロームブロック主体	天井部崩落 粘性、しまり弱い
2．暗褐色土 暗褐色土主体	多量のロームが混ざる 粘性、しまり弱い	5．暗黒褐色土 ローム主体	少量の暗褐色土、多量のロームブロックが混ざる 粘性、しまり弱い
3．褐色土 暗褐色土主体	少量の黒色土、少量のロームブロックが混ざる 粘性、しまり弱い		

第10図　１号土坑墓実測図

３．１号土坑墓　（第10図）

検出状況　調査区南側、Ｃトレンチの拡張地点に位置する。当初は住居跡と考え調査に着手したが完掘状況から土坑墓とした。高い段丘面から東へ斜面の角度を変える縁辺に位置し、ａ地点の土坑、炉穴と同じ程度の標高を測る。等高線に対して、長軸はほぼ直行する。重複関係　単独。２／３の検出。

平面形・規模　上部はいびつな正方形、底部はいびつな長方形を呈する。上部1.40m×1.80m、下部1.00m×1.80m、深さ1.20mの規模(想定の復元から)。底面は、東側から西側に傾斜し、オーバーハングした西側が最も低い。底面の東部分は、調査範囲外にのびる細く長い溝状の浅いくぼみが認められた。何らかの付属施設か。

長軸・壁面　ほぼ北－南。壁面はほぼ垂直に立ちあがる。底面は平坦である。

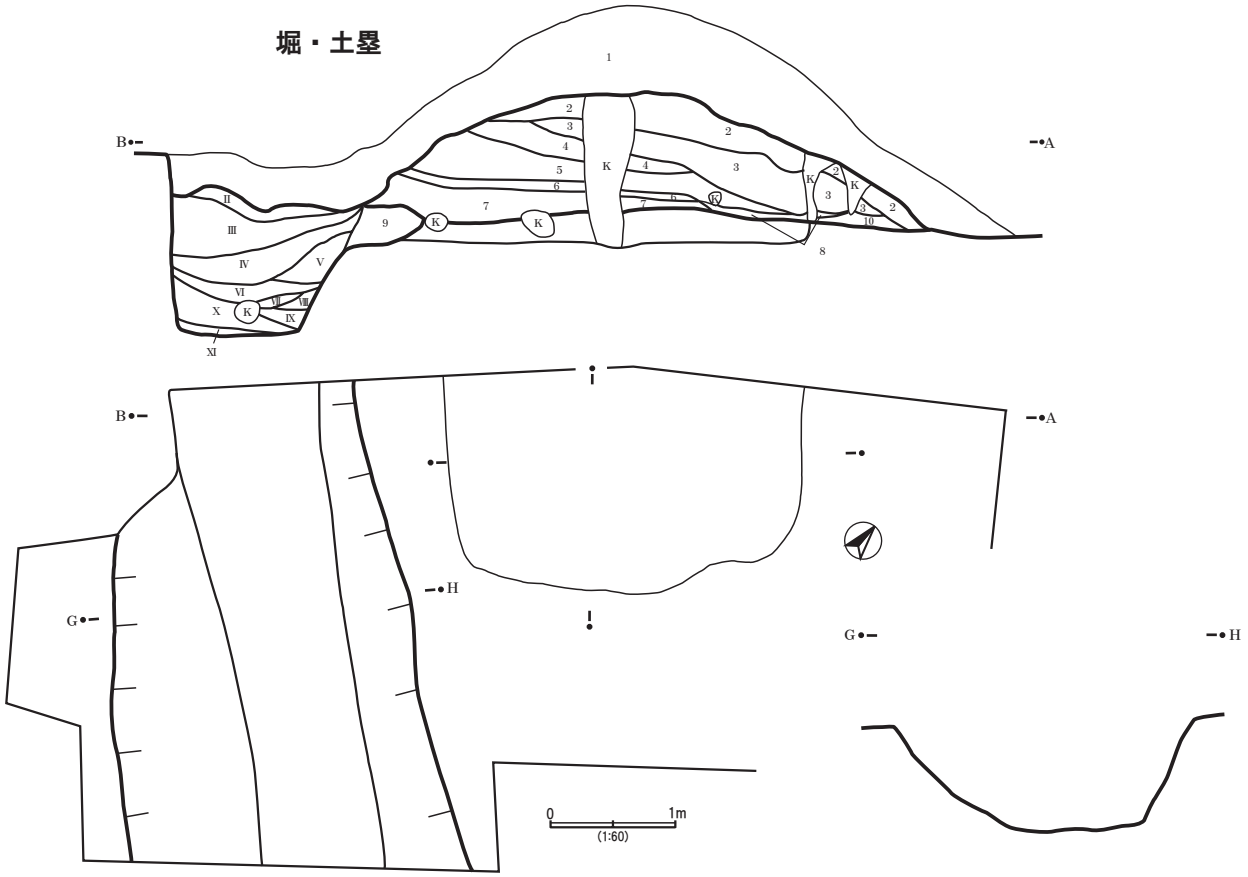
覆土の状況　５層に分層できる。暗褐色土主体で粘性、しまり共にない。４層は天井崩落土。３、４、５層ロームブロックを含む。１，２層は自然堆積だが、３、４、５層は人為的堆積であろう。

出土遺物　覆土上層～下層にかけて小破片が散漫と出土する状況。おもに縄文中期阿玉台式の遺物（50点）が出土し古墳前期土師器（10点）が次ぐ。床面直上の遺物はなし。

時期・性格　遺構に伴う遺物の出土は見られなかった。遺構の形態は、いわゆる底部付近がＬ字に短軸方向へオーバーハングする有天井土坑であり、遺物の出土状況、覆土の観察、周辺の調査事例から奈良・平安時代の土坑墓と判断できる。

４．堀・土塁　（第11図）

検出状況　調査区中央、Ａトレンチの拡張地点に位置する。高い段丘面から東へ斜面の角度を変える縁辺に位置し、等高線に対して直行する。遺構検出地点より北には、高い段丘面崖線が「コ」の字状に見える地形が観察できる。「コ」の字状の地形が、人工的な地形改変を受けているとすれば、堀・土塁はそれに関連する可能性が大きい。土塁に関しては地形測量図などには現われておらず、トレンチを掘削し、土層断面の観察を行い、堀に接して伴う検出状況から土塁と判断した。重複関係　１号住居跡を壊す。調査区域外に延びる遺構の一部分を検出する。



Ⅱ．暗褐色土　暗褐色土主体　多量の褐色土が混ざる　粘性非常に弱い　しまり非常に弱い
Ⅲ．暗褐色土　褐色土主体　ごく少量の黒色土が混ざる　粘性弱い、しまり弱い
Ⅳ．暗褐色土　暗褐色土主体　少量の黒色土が混ざる　粘性弱い、しまり弱い
Ⅴ．黒褐色土　黒色土主体　少量の暗褐色土が混ざる　粘性弱い、しまり弱い
Ⅵ．暗褐色土　暗褐色土主体　少量の黒色土が混ざる　粘性弱い、しまり弱い
Ⅶ．黒褐色土　黒色土主体　少量の暗褐色土が混ざる　粘性弱い、しまり弱い
Ⅷ．暗褐色土　暗褐色土主体　多量の黒色土が混ざる、少量のロームを含む　粘性弱い、しまり弱い
Ⅸ．暗褐色土　暗褐色土主体　少量の黒色土、少量のロームが混ざる　粘性弱い、しまり弱い
Ⅹ．暗褐色土　暗褐色土とロームが均一に混ざる　粘性普通、しまり弱い
Ⅺ．暗黄褐色土　ローム主体　少量の暗褐色土が混ざる　粘性普通、しまり弱い
1．表土
2．暗褐色土　暗褐色土主体　少量の黒色土、少量のロームが混ざる　粘性非常に弱い、しまり強い
3．暗褐色土　暗褐色土主体　少量の黒色土、少量のロームが混ざる、ロームブロック含　粘性非常に弱い、しまり強い
4．黒褐色土　黒色土主体　少量の暗褐色土、少量のロームが混ざる　粘性非常に弱い、しまり強い
5．暗褐色土　暗褐色土主体　少量の黒色土、ごく少量のロームが混ざる　粘性非常に弱い、しまり強い
6．暗褐色土　暗褐色土主体　少量の暗褐色土、ごく少量のロームが混ざる　粘性非常に弱い、しまり強い
7．黒褐色土　黒色土主体　少量の暗褐色土が混ざる　粘性非常に弱い、しまり強い
8．暗褐色土　暗褐色土主体　少量の黒色土が混ざる　粘性非常に弱い　非常にしまり強い
9．暗褐色土　暗褐色土とごく少量の黒色土が均一に混ざる　粘性弱い、しまり弱い
10．暗黒褐色土　暗褐色土と少量のロームが均一に混ざる　粘性弱い、しまり強い

第11図　堀・土塁実測図

平面形・規模　土塁は上段部1.20m、下段部4.50m、高さ1.00mを測り、長さは3.50m程度であった。堀は、上部最大幅2.50m、下部最大幅1.20m、深さ1.20mを測る。土塁は頂部を起点に緩やかに傾斜する。

長軸・壁面　北西から南東へ伸びる。堀壁面は逆台形で、西に比べ土塁に接する東壁面は急角度で立ち上がる。溝の底面は平坦である。

覆土の状況　堀はハードロームを掘り込み掘削されている。土質は全体に粘性、しまり共にない。土塁は７層で一旦平坦面を構築し、その上に土を盛り上げる。土塁は堀のある西側からの傾斜が見て取れ､堀を掘り下げた土を単に盛ることにより構築されていることが分かる。

出土遺物　小破片が散漫と出土する状況である｡遺構外に図示した円筒埴輪は堀下層付近から出土。種別は、条痕文57点、阿玉台27点、堀之内62点、黒曜石１点、礫６点、弥生11点、土師器178点、かわらけ１点が認められた。

時期・性格　遺構に伴う遺物の出土はなかった。遺物の出土傾向から、堀を掘削し、周辺の土を利用して土塁を構築している。ａ地点では、高位段丘面の北端で中世の土塁或いは馬囲いかと思われる長方形の土堤（50m×30m×高さ３～４ｍ）が確認されている。ｂ地点で検出した堀・土塁はその土堤の南側の一部であろう。

第２節　遺構外出土遺物

遺跡出土の遺構外出土遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世の多岐にわたる。いずれも小破片だが、おおびた遺跡を特徴づけるものであり、可能な限り図示した。以下簡単に述べる。

縄文早期（80点）、縄文前期（３点）、縄文中期（565点）、縄文後期（11点）、黒曜石（２点）、弥生（25点）、古墳（59点）、古代（39点）、中世（５点）の他に、時期不明な炭化物、貝なども出土した。

１．縄文時代　（第12、13、14図、第４、５表）

早期・前期・中期・後期の土器が調査範囲内で認められ、土製品・石器も出土した。遺構に伴わないと判断した遺物については本節で取り扱う。主体となる遺物は、中期阿玉台式期であり、調査範囲外にも遺構の存在を予想させる。早期条痕文期の土器は、中期に次ぐ点数であり、ａ地点の調査成果を追認し、炉穴以外にも遺構の存在を想定させる。前期・中期の時期には、人々が定住した可能性があるが、前述した時期以外は、生活の痕跡が薄い期間であり、遺跡の在り方が断続的であることが理解できる。

（１）縄文土器

出土した遺物は、時期別に４群に分け、その中で類別を行った。

第１群土器　縄文時代早期の土器群
第２群土器　縄文時代前期の土器群
第３群土器　縄文時代中期の土器群
第４群土器　縄文時代後期の土器群

第１群土器

早期の条痕文系土器を一括する。調査区中央から出土。

第１類　野島式　（第12図、第４表、１～６）

３、条痕の上から沈線。４、表面は沈線のみを施す

第２類　野島～鵜ヶ島台式　（第12図、第４表、７～16）

７、８、９は、刻み目を施す口縁部片。刻み目は、細かいものと荒いものがみられる。

第３類　鵜ヶ島台式　（第12図、第４表、17～20）

17、19、20は、同一個体。区画内に押し引きを充填する。

第２群土器

前期末葉の土器を一括する。調査区中央東側から出土。

第１類　粟島台式（第13図、第５表、21～23）

いずれの器面にも結節縄文が認められる。

第３群土器

中期初頭・前葉の土器を一括する。阿玉台式の量が他を圧倒しており、本遺跡の主体を占める。調査区全般から出土。

第１類　五領ヶ台式　（第13図、第５表、24～28）

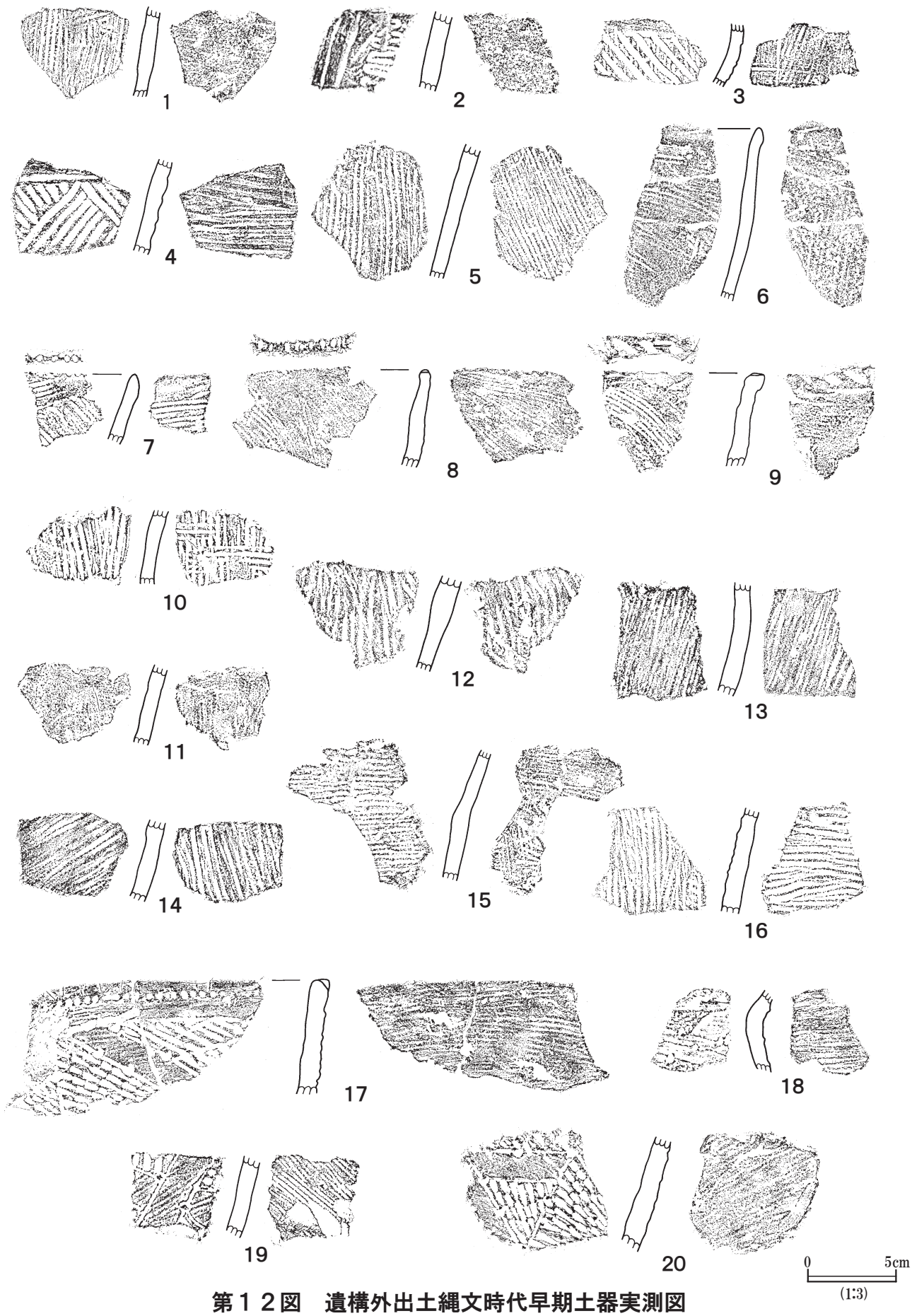
口縁部～胴上半部が出土した。いずれもの個体も突起はない。

第２類　阿玉台式　（第13、14図、第５、６表、29～61）

Ⅰａ、Ⅰｂ、Ⅱ式が出土した。ほとんどに金雲母の混入を見られる。

第３類　勝坂式　（第14図、第６表、62）

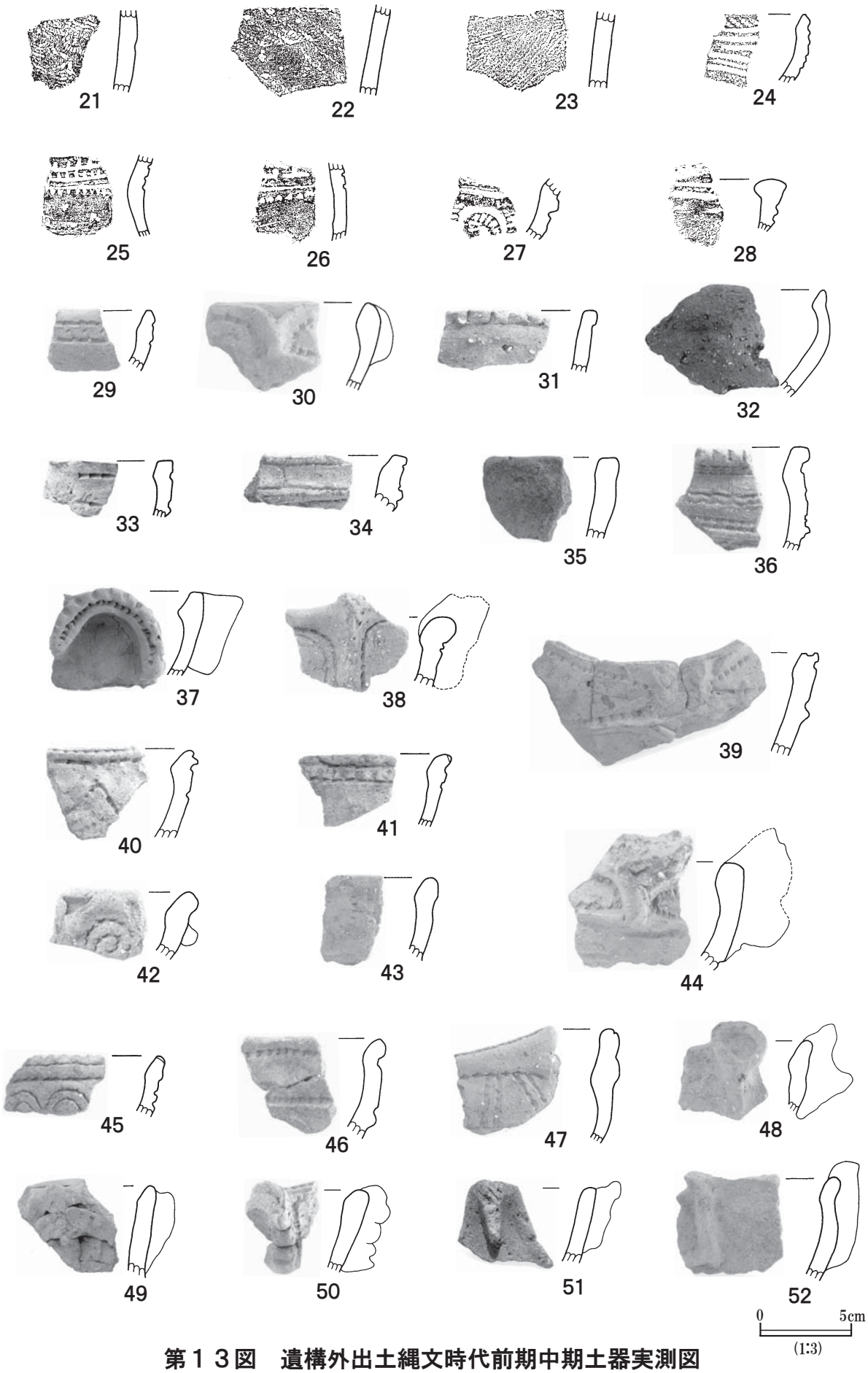
62、１点の出土を見る。隆線で区画を構成し、器面に立体的文様を表出させる。



第１２図　遺構外出土縄文時代早期土器実測図

第4表　遺構外出土縄文時代早期遺物観察表

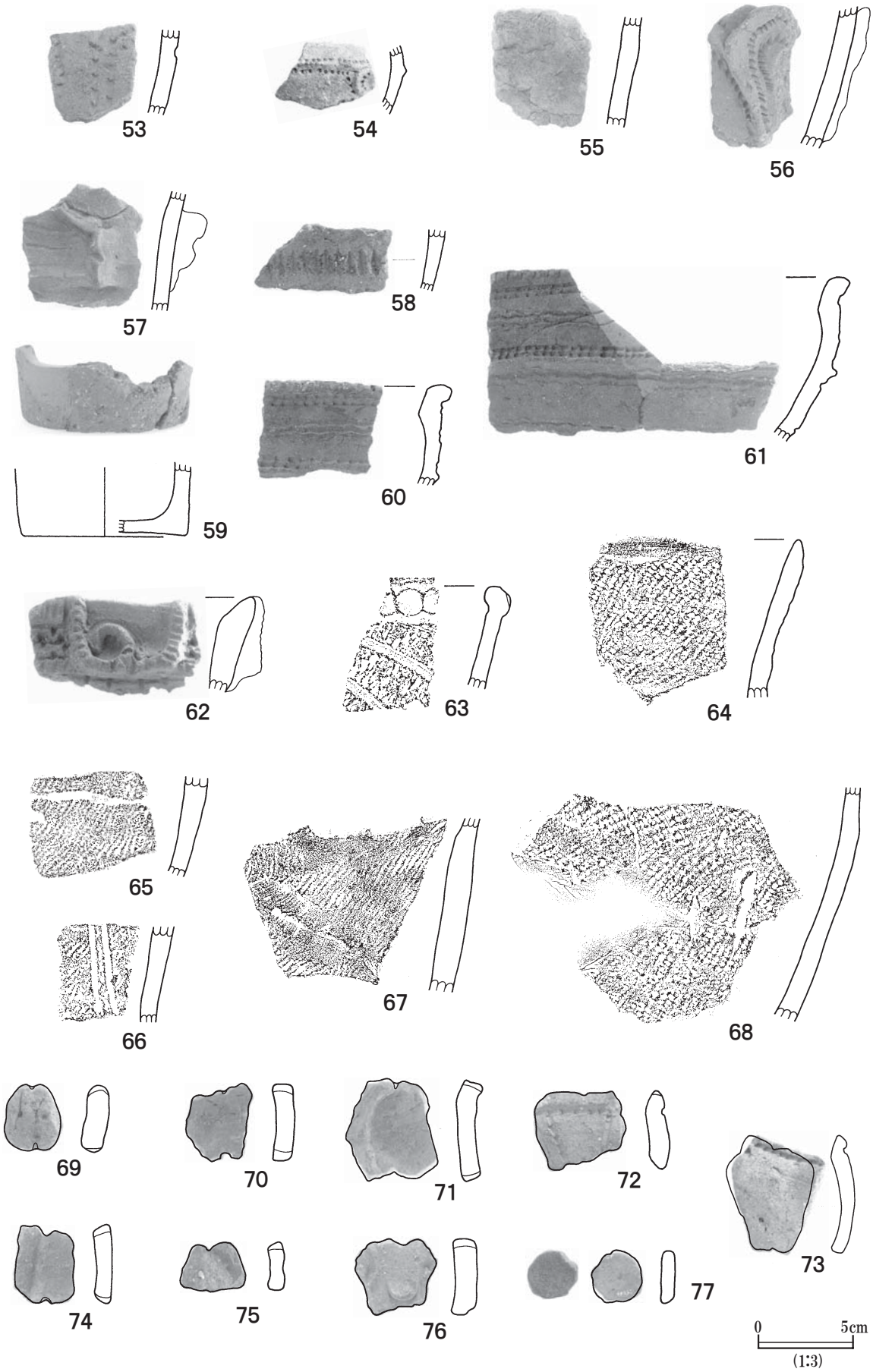
No.	器種	遺存度	色 調	胎 土	焼成	文様・調整等の特徴	備 考
1	縄文 深鉢	胴部片	暗褐色	長石多 石英少	普	外面　縦位・斜位の浅い条痕を施す。 内面　無装飾。	野島式 1P一括
2	縄文 深鉢	胴部片	橙褐色	長石少 繊維含	普	外面　縦位の沈線で区画し、区画内に沈線で曲水文を施す。 内面　ナデ。	野島式 2D一括
3	縄文 深鉢	胴部片	褐色	雲母微 繊維含	普	外面　縦位に条痕を施した後、斜位の深い沈線を施す。 内面　浅い条痕を施す。	野島式 2D一括
4	縄文 深鉢	胴部片	褐色	長石多 雲母微	普	外面　横位の沈線で区画を描く。区画内に斜位の沈線を交互に充填する。 内面　浅い条痕を施す。	野島式 2D一括
5	縄文 深鉢	胴部片	褐色	長石少 石英少 繊維含	普	外面　縦位の浅い条痕を施す。 内面　斜位の浅い条痕を施す。	野島式 1M一括
6	縄文 深鉢	口縁部片	淡黄褐色	繊維含	普	口縁は平縁　角頭状。 外面　横位の浅い条痕を施す 内面　ナデ。	野島式 1M一括
7	縄文 深鉢	胴部片	暗黄褐色	長石多 繊維含	普	口縁は平縁　角頭状。 外面　口唇刻み目。口縁部浅い横位の条痕を施し、口縁直下、斜位の条痕を施す。 内面　横位の浅い条痕を施す。	野島～ 鵜ヶ島台式 2D一括
8	縄文 深鉢	口縁部片	淡褐色	長石多 雲母微 繊維含	普	口縁は平縁　丸頭状。 外面　口唇部刻み目。斜位の浅い条線を施す。 内面　斜位の浅い条線を施す。	野島～ 鵜ヶ島台式 2D46
9	縄文 深鉢	口縁部片	淡褐色	長石少	普	口縁は平縁　丸頭状。 外面　口唇部刻み目、口唇部横位に隆線がめぐる。斜位の浅い条線を施す。 内面　横位の浅い条線施す。	野島～ 鵜ヶ島台式 2D一括
10	縄文 深鉢	胴部片	褐色	砂粒含 繊維含	普	外面　縦位の深い条痕を施す。 内面　縦位・横位の浅い条痕を施す。	野島～ 鵜ヶ島台式 1M一括
11	縄文 深鉢	胴部片	外面 黒色 内面 淡黄色	雲母少 長石少 繊維含	普	外面　無装飾。 内面　縦位の浅い条痕を施す。	野島～ 鵜ヶ島台式 2D78
12	縄文 深鉢	胴部片	外面 褐色 内面 黄褐色	雲母微 繊維含	普	外面　縦位・斜位の浅い条痕を施す。 内面　斜位の浅い条痕を施す。	野島～ 鵜ヶ島台式 1M一括
13	縄文 深鉢	胴部片	褐色	長石少 繊維含	普	外面　斜位の浅い条痕を施す。 内面　斜位の浅い条痕を施す。	野島～ 鵜ヶ島台式 2D一括
14	縄文 深鉢	胴部片	燈褐色	長石多 石英微	普	外面　斜位の条痕を施す。 内面　縦位の条痕を施す。	野島～ 鵜ヶ島台式 1P一括
15	縄文 深鉢	胴部片	暗褐色	長石少 繊維含	普	外面　横位の浅い条痕を施す。 内面　横位の浅い条痕を施す。	野島～ 鵜ヶ島台式 2D166
16	縄文 深鉢	胴部片	褐色	長石微 繊維含	普	外面　縦位の深い条痕を施し、円形竹管での弱い押引きを施す。 内面　横位の深い条痕を施す。	野島～ 鵜ヶ島台式 2D105
17	縄文 深鉢	口縁部片	淡燈褐色	雲母微 繊維含	良	口縁は平縁　角頭状。 外面　口唇部刻み目。深い横位の沈線と浅い斜位の沈線で区画を描く。区画描線の交差部及び線中に円形の刺突を施す。区画内は押引文を充填する。 内面　浅い横位の条線を施す。	鵜ヶ島台式 19、20と同一固体 他にも同一個体多数 2D22、12
18	縄文 深鉢	胴部片	淡褐色	長石多 雲母微 繊維含	普	外面　微隆起で区画を描く。区画内に円形の刺突を充填する。 内面　浅い横位の条線を施す。	鵜ヶ島台式 調査区一括
19	縄文 深鉢	胴部片	灰黄褐色	長石少	普	浅い条痕文が地文。 外面　浅い斜位の沈線に区画され沈線が横位に交差する。交差部には円形の刺突を施す。部分により区画内を太い沈線で充填する。 内面　浅い条痕を施す。	鵜ヶ島台式 17、20と同一個体 Dトレンチ
20	縄文 深鉢	口縁部片	淡燈褐色	雲母微 繊維含	良	外面　深い横位の沈線と浅い斜位の沈線で区画を描く。区画描線の交差部には円形の刺突を施す。区画内に押引文を充填する。 内面　浅い斜位の条線を施す。	鵜ヶ島台式 17、19と同一個体2D一括



第１３図　遺構外出土縄文時代前期中期土器実測図

第5表　遺構外出土縄文時代前期・中期遺物観察表

No.	器種	遺存度	色 調	胎 土	焼成	文様・調整等の特徴	備 考
21	縄文 深鉢	胴部片	外面 淡橙褐色 内面 淡黒褐色	長石微 雲母微	普	単節RL縄文が地文。 外面　斜位に結節縄文が施される。 内面　ヨコナデ。	前期 粟島台式 2D一括
22	縄文 深鉢	胴部片	外面 褐色 内面 淡黒褐色	長石微 雲母微	良	外面　ヨコナデの後、斜位に結節縄文が施される。 内面　ナデの後、ヘラミガキが施される。	前期 粟島台式 23と同一個体 2D150
23	縄文 深鉢	胴部片	外面 褐色 内面 淡黒褐色	長石微 雲母微	良	外面　浅い条線の後、斜位に結節縄文が施される。 内面　ヨコナデ後、ヘラミガキが施される。	前期 粟島台式 22と同一個体 2Dpit
24	縄文 深鉢	口縁部片	赤褐色	長石小 石英微 雲母微	普	口縁は平縁　角頭状。 外面　口唇端部縄文による刻み目。横位に沈線を施す。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 五領ヶ台式 土塁一括
25	縄文 深鉢	口縁部片	淡燈褐色	石英多 長石多 雲母微	普	口縁は平縁　丸頭状。 外面　横位の平行沈線。 内面　口唇に横位の稜がめぐる。横ナデ。	中期 五領ヶ台式 土塁一括
26	縄文 深鉢	口縁部片	赤褐色	長石多 雲母微	量	口縁は波状縁。 外面　口唇直下横位の沈線。沈線下、横位に隆線。刻み目の付いた隆線で区画を描く。区画内に沈線、その中に刻み目で丸く区画をを施す。 内面　ナデ。	中期 五領ヶ台式 土塁一括
27	縄文 深鉢	胴部片	赤褐色	長石多 雲母微	良	外面　平行沈線を横位に2本。上の沈線に刺突を施す。沈線下に円形工具の横位の連続刺突を施す。 内面　横ナデ。	中期 五領ヶ台式 1M一括
28	縄文 深鉢	胴部片	淡燈褐色	長石多	普	外面　平行沈線を横位に3本施す。上2本上部から半裁竹管等の工具で交互刺突、下1本下部から半裁竹管等の工具で連続刺突を施す。 内面　ミガキの痕跡あり。	中期 五領ヶ台式 2D107
29	縄文 深鉢	口縁部片	赤褐色	長石少 雲母微	良	口縁は平縁　角頭状。 外面　口縁直下に横位の沈線2本。横位の沈線を区画するかのように斜位の角押文が施される。 内面　弱い稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉａ 1M一括
30	縄文 深鉢	口縁部片	淡橙褐色	長石微	良	口縁は平縁　角頭状。 外面　縦位に突起を付し、突起を起点に枠状区画を描く。区画に沿って角押文を施す。 内面　横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉｂ 2D43
31	縄文 深鉢	口縁部片	淡燈褐色	長石多 石英少 雲母少	良	口縁は平縁　平頭状。 外面　口唇部に横位の連続押圧文を施す。 内面　横ナデ。	中期 阿玉台Ｉｂ 1M一括
32	縄文 浅鉢	口縁部片	淡黒褐色	雲母多 長石多 石英多	良	口縁は平縁　角頭状。 外面　無装飾。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉｂ Dトレンチ
33	縄文 深鉢	口縁部片	橙褐色	長石少 雲母微	良	口縁は平縁　平頭状。 外面　離れた横位の2本の角押文を施す。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉｂ Eトレンチ
34	縄文 深鉢	口縁部片	淡燈褐色	長石多 石英多	良	口縁は平縁　平頭状。 外面　口唇直下に横位の角押文を施す。横位の隆線の脇に角押文を沿わせる。 内面　横ナデ。	中期 阿玉台Ｉｂ 1M一括
35	縄文 深鉢	口縁部片	淡黒褐色	長石多 雲母微	良	口縁は平縁　平頭状。 外面　ヒダ状の装飾を施す。 内面　横ナデ。	中期 阿玉台Ｉｂ Cトレンチ
36	縄文 深鉢	口縁部片	淡燈褐色	雲母多 長石多 石英少	良	口縁は平縁　丸頭状。 外面　口唇端部に角押文、口唇直下の横位に複列の角押文を施す。口縁下横位に浅い波状沈線を施す。横位隆線の上に複列の角押文を沿わせる。 内面　横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉｂ Cトレンチ
37	縄文 深鉢	口縁部片	淡褐色	雲母微	良	口縁は平縁　平頭状。 外面　平円の突起を付す。突起には刻み目と角押文を施す。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉｂ 2D24
38	縄文 深鉢	口縁部片	淡褐色	雲母多 長石多 石英少	良	口縁は波状縁　丸頭状。 外面　波頂部下に縦位の突起を添付し、これを起点に区画を描く。二列の角押文を区画に沿わせる。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉｂ 1D1
39	縄文 深鉢	口縁部片	外面 淡燈褐色 内面 暗褐色	長石少	良	口縁は波状縁　丸頭状。部分的に赤彩される。 外面　口唇部に平行する横位2列の角押文、横位の山形の角押文を施す。 内面　器面は荒れる。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉｂ 塚一括
40	縄文 深鉢	口縁部片	外面 暗黄褐色 内面 淡黄褐色	長石多	普	口縁は平縁　丸頭状。 外面　口唇端部刻み目。稜を挟んで平行した2列横位の角押文。2列の角押文の間に連続した押圧文を施す。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉｂ Dトレンチ
41	縄文 深鉢	口縁部片	淡燈褐色	長石少 雲母微	良	口縁は平縁　口唇部角押し文　平頭状。 外面　2列の角押文で楕円区画を描く。その中に隆線がめぐる。 内面　横ナデ。横位に弱い稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉｂ 2D170
42	縄文 深鉢	口縁部片	淡褐色	石英多 雲母多	普	口縁は平縁　丸頭状。 外面　縦位の突起を中心に隆線による区画を描く。その区画内に平行な角押文を2列施す。 内面 横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ｉｂ 1M一括
43	縄文 深鉢	口縁部片	淡褐色	雲母少 長石少	良	口縁は平縁　丸頭状。 外面　1列の角押文により弧状の枠上区画を描く。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	阿玉台Ｉｂ 1D一括



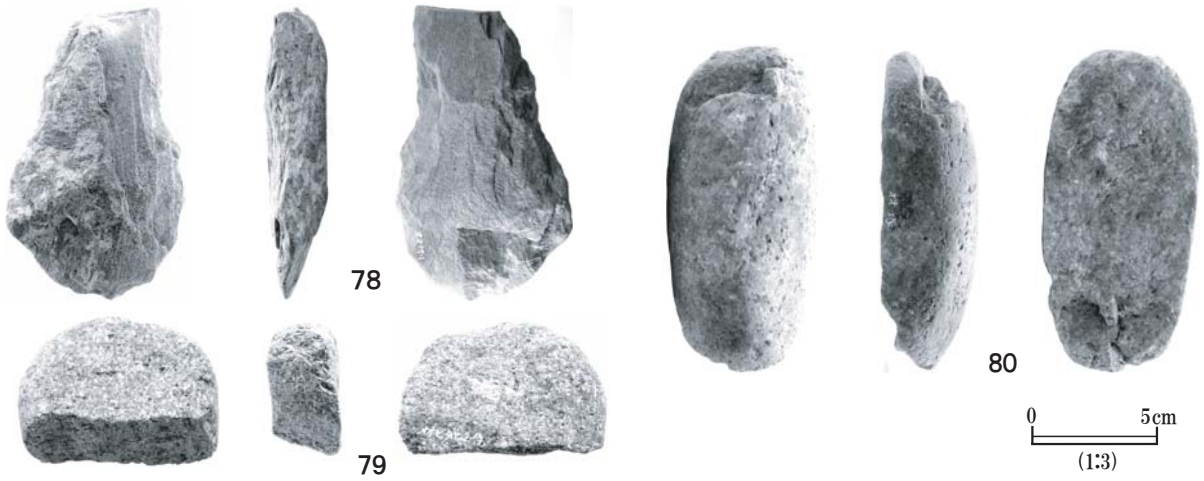
第１４図　遺構外出土縄文時代中期後期土器実測図

第6表　遺構外出土縄文時代中期遺物観察表

No.	器種	遺存度	色 調	胎 土	焼成	文様・調整等の特徴	備 考
44	縄文 深鉢	口縁部片	淡燈褐色	雲母多 長石多 繊維含	普	口縁は平縁　角頭状。 外面　刻み目のある扇状突起を中心に縦位の突起を付す。突起を起点に隆線の区画を描き、区画内に単列の角押文を沿わせる。突起、角押文下に横位の沈線を施す。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ⅰb式 1M一括
45	縄文 深鉢	口縁部片	暗褐色	雲母多 長石多 石英少	普	口縁は平縁　角頭状。 外面　口唇部刻み目。口縁部、並行する横位に2列の角押文を施す。並行する2列の角押文で弧状の区画を描く。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ⅰb式 Cトレンチ
46	縄文 深鉢	口縁部片	外面 暗黄褐色 内面 淡黄褐色	長石多 石英少	普	口縁は平縁　丸頭状。 外面　横位に平行する角押文を施す。横位にわずかな隆線がめぐる。 内面　横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ⅰb式 1M一括
47	縄文 深鉢	口縁部片	淡灰褐色	雲母多 長石多	良	口縁は波状縁　丸頭状。 外面　口唇部に弱い角押文を施す。半截竹管で上下横位に区画を構成する。区画内に縦位2列の角押文を施す。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ⅰb式 2D18
48	縄文 深鉢	口縁部片	淡橙褐色	雲母多 長石多 石英多 小石含	普	口縁は平縁　丸頭状。 外面　扇状突起を中心に縦位の突起を付す。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ⅰb式 Dトレンチ
49	縄文 深鉢	口縁部片	淡燈褐色	雲母微	良	口縁は平縁　丸頭状。 外面　ひだ状の地文。口縁下に粘土棒をまく。縦位の突起を付す。 内面　横ナデ。	中期 阿玉台Ⅰb式 2D一括
50	縄文 深鉢	口縁部片	淡橙褐色	長石多	良	口縁は平縁　丸頭状。 外面　口唇部に角押文を施す。棒状突起を縦位に付す。角押文で突起に沿わせるように区画を描く。 内面　横ナデ。	中期 阿玉台Ⅰb式 1M一括
51	縄文 深鉢	口縁部片	燈褐色	石英多 長石多 雲母少	普	口縁は波状縁　丸頭状。 外面　粘土棒を芯にこれを粘土板で巻いた縦位の突起を付す。突起を起点として口縁に沿って弱い隆帯を垂下させる。 内面　横ナデ。	中期 阿玉台Ⅰb式 Cトレンチ
52	縄文 深鉢	口縁部片	淡褐色	長石多	良	口縁は平縁　丸頭状。 外面　縦位の突起を中心に隆線により枠上区画を描く。区画内に非常に弱い角押文を沿わせる。 内面　ミガキ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ⅰb式 Cトレンチ
53	縄文 深鉢	胴部片	外面 淡燈褐色 内面 淡黄褐色	雲母多 長石少 石英少	普	外面　縦位に2列の角押文を施し、斜位の角押文で区画を構成を描く。 内面　横ナデ。	中期 阿玉台Ⅰb式 Dトレンチ
54	縄文 深鉢	胴部片	外面 燈褐色 内面 淡黒褐色	長石多 雲母微	普	外面　横位に隆線がめぐり、それを基準に区画を描く。隆線脇に角押文を沿わせる。 内面　横ナデ。	中期 阿玉台Ⅰb式 2Dpit
55	縄文 深鉢	胴部片	外面 暗褐色 内面 淡橙褐色	長石多 石英多	普	外面　ひだ状。整形痕を荒く残す。 内面　縦位の幅広のヘラケズリ。	中期 阿玉台Ⅰb式 1M5
56	縄文 深鉢	胴部片	淡褐色	雲母多 石英多	良	外面　隆線により枠状区画を描く。区画内に角押文を2列沿わせる。 内面　ミガキ。	中期 阿玉台Ⅰb式 Cトレンチ
57	縄文 深鉢	胴部片	暗燈褐色	雲母多 長石多	良	外面　縦位の突起を起点に横位の隆線で区画を描く。区画内に平行する横位2列の浅い沈線を施す。突起下、弧状の角押文を施す。 内面　丁寧なナデ。	中期 阿玉台Ⅰb式 2D168
58	縄文 深鉢	口縁部片	外面 淡燈褐色 内面 淡褐色	雲母少 長石少	普	外面　貝殻による刻目文。 内面　横ナデ。	中期 阿玉台Ⅰb式 1P12
59	縄文 深鉢	底部片 2/3	外面 淡褐色 内面 淡黄褐色	石英多 長石少	良	外面　ヘラケズリ 内面　ナデ 底部　ヘラミガキ	中期 阿玉台式期 Cトレンチ
60	縄文 深鉢	口縁部片	淡黒褐色	雲母多 長石多 黒色砂粒多	良	口縁部は平縁　丸頭状。 外面　口唇端部に刻み目を施す。口縁下に横位の隆線をめぐらせ、その間に複列角押文、浅い波状沈線、複列角押文が横位に施される。横位隆線の下には浅い沈線を沿わせ、間隔をあけ浅い沈線が並行する。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台式期 1D8、18
61	縄文 深鉢	口縁部片	橙褐色	雲母多 長石多 黒色砂粒多	良	口縁部は平縁　丸頭状。 外面　口唇端部に刻み目を施す。口縁下に横位の隆線をめぐらせ、その間に複列角押文、浅い波状沈線、複列角押文が横位に施される。 内面　横ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台Ⅱ式 60と同一個体 1P6
62	縄文 深鉢	口縁部片	淡黄褐色	雲母多 長石多	良	口縁は平縁　角頭状。 外面　口唇直下に刻み目。刻み目のある隆線で枠状区画を描く。横位の隆線沈線で区画に連携させる。隆線・沈線間を斜めの円形刺突で交互に沈線を施しながら充填する。横位隆線下には円形刺突を用いて刻み目状の装飾を施す。 内面　横ナデ。	中期 勝坂式 1M　一括

第7表　遺構外出土縄文時代後期・土製品・石器遺物観察表

No.	器種	遺存度	色 調	胎 土	焼成	文様・調整等の特徴	備 考
63	縄文 深鉢	口縁部片	淡橙褐色	長石少 雲母少	普	口縁は平縁　平頭状。 外面　口唇部に押圧のような連続した刻み目。粗い縄文を地文に施す。 RLか。斜位の浅い沈線が施される。 内面　横ナデ	後期 堀之内式 Eトレンチ
64	縄文 深鉢	口縁部片	淡褐色	長石且少 雲母微	良	口縁は平縁　角頭状。 外面　縄文単節LRを施す。 内面　横ナデ。	後期 堀之内式 2D一括
65	縄文 深鉢	胴部片	淡黄褐色	長石多	普	外面　縄文単節LRを施す。 内面　横ナデ。	後期 堀之内式 68と同一個体 1M一括
66	縄文 深鉢	胴部片	淡橙褐色	長石多	良	外面　縄文単節LRを施す。縦位の沈線が垂下する。 内面　横ナデ。	後期 堀之内式 2D一括
67	縄文 深鉢	胴部片	淡橙褐色	長石少 繊維含	良	外面　縄文単節LRを施す。 内面　ヘラミガキ。	後期 堀之内式 1P一括
68	縄文 深鉢	胴部片	橙褐色	長石多 雲母少 繊維含	良	外面　縄文単節LRを施す。 内面　横ナデ。	後期 堀之内式 65と同一個体 2D一括
69	縄文 深鉢	土器片錘	外　橙褐色 内　黒色	長石多	不良	胴部片使用　長軸方向に索溝を2つ持つ。側面は調整される。 外面　ひだ状の地文。円形の刺突を施す。 内面　ナデ。	中期 阿玉台式 2P一括
70	縄文 深鉢	土器片錘	淡褐色	長石多 雲母微	普	胴部片使用　長軸方向に索溝を2つ持つ。側面は調整される。 外面　ひだ状の地文。 内面　ナデ。	中期 阿玉台式 2D一括
71	縄文 深鉢	土器片錘	黒褐色	雲母少 長石微	良	胴部片使用　長軸方向に索溝を2つ持つ。側面は調整される。 外面　隆線で区画を描く。 内面　ヘラミガキ。	中期 阿玉台式 2D　122
72	縄文 深鉢	土器片錘	淡褐色	雲母多 長石多 石英多	良	口縁片使用　長軸方向に索溝を2つ持つ。側面は調整される。 外面　口縁は波状縁で隆線がめぐる。隆線に角押文を沿わせる。 内面　ナデ。	中期 阿玉台式 1P一括
73	縄文 深鉢	土器片錘	外　黒褐色 内　淡黄褐色	石英多 長石多 雲母少	良	口縁片使用　長軸方向に索溝を2つ持つ。側面は打ち欠き。 外面　口縁は平縁で隆線がめぐる。隆線直下横位沈線を施す。 内面　ナデ。横位に稜がめぐる。	中期 阿玉台式 2D　137
74	縄文 深鉢	土器片錘	淡黒褐色	雲母多 長石少	良	胴部片使用　長軸方向に索溝を2つ持つ。側面は打ち欠き。 外面　隆線がめぐる。 内面　ナデ。	中期 阿玉台式 2D一括
75	縄文 深鉢	土器片錘	淡褐色	長石多 石英多 雲母少	良	胴部片使用　短軸方向に索溝を1つ持つ。側面は打ち欠き。 外面　半円形に隆線がめぐる。隆線に沈線と角押文が沿うように施す。 内面　ナデ。	中期 阿玉台式 2D　一括
76	縄文 深鉢	土器片錘	淡黄褐色	長石多 石英多 雲母微	良	口縁片使用　長軸方向に索溝を1つ持つ。側面は調整される。 外面　口縁直下に角押文を施す。 内面　ナデ。	中期 阿玉台式 Cトレンチ
77	縄文 深鉢	土製円盤	淡褐色	雲母少 長石微	良	胴部片使用。側面は打ち欠き調整を加えている。 外面　ナデ。 内面　ナデ。	中期 阿玉台式 Aトレンチ
78	縄文 打製石器	1/2	－	－	－	石材不明。長さ10.3cm×幅6.0×厚さ2.1cm　重さ130g 表面中央に自然面を残す。	中期 阿玉台式期か 1M一括
79	縄文 磨石か	1/2	－	－	－	石材砂岩。長さ7.9cm×幅5.7cm×厚さ3.0cm　重さ165g 側面に使用痕あり。	中期 阿玉台式期か 2D一括
80	縄文 焼礫	1/2	－	－	－	石材不明。長さ12.2cm×幅5.7cm×厚さ3.3cm　重さ317g 全体に被熱し赤みがかる。手のひらに収まる大きさ。	塚一括



第１５図　遺構外出土縄文時代石器図

第４群土器

後期前葉の土器を一括する。調査区北～中央にかけて出土。

第１類　堀之内式（第14図、第７表、63～68）

単節縄文の地文。すべて堀之内１式に比定できる。

（２）土製品　（第14図、第７表、69～77）

調査区中央部から出土。69～77までは土器片錘、77が土製円盤。側面調整の個体と未調整の個体がみられる。

（３）石器　（第15図、第７表、78、79、80）

調査区中央部から出土。打製石斧は、１／２遺存。焼礫は、半分欠損。割れた内側が特に赤味がかる。

２．弥生時代以降

（１）弥生土器　（第16図、第８表、81～83）

調査区中央部から出土。掲載した以外にも、小破片は出土したが図示できなかった。附加条が地文として施される。弥生時代後期に想定できる。

（２）土師器　（第16図、第８表、84～86）

調査区中央部から出土。掲載した以外にも、小破片は出土したが図示できなかった。84は、口唇部に刻み目を持つ。85は、小型器台の坏部。外形は若干丸みを帯びる。86は、器台の台部。円形の透かしを持つ。台部は、「ハ」の字状に外側開く。

（３）円筒埴輪　（第16図、第８表、87、88）

調査区中央部から出土。他にも小破片は出土したが、接合せず。88は、断面三角形の突帯がめぐる。ａ地点でも埴輪小破片は出土。

（４）須恵器　（第16図、第８表、89）

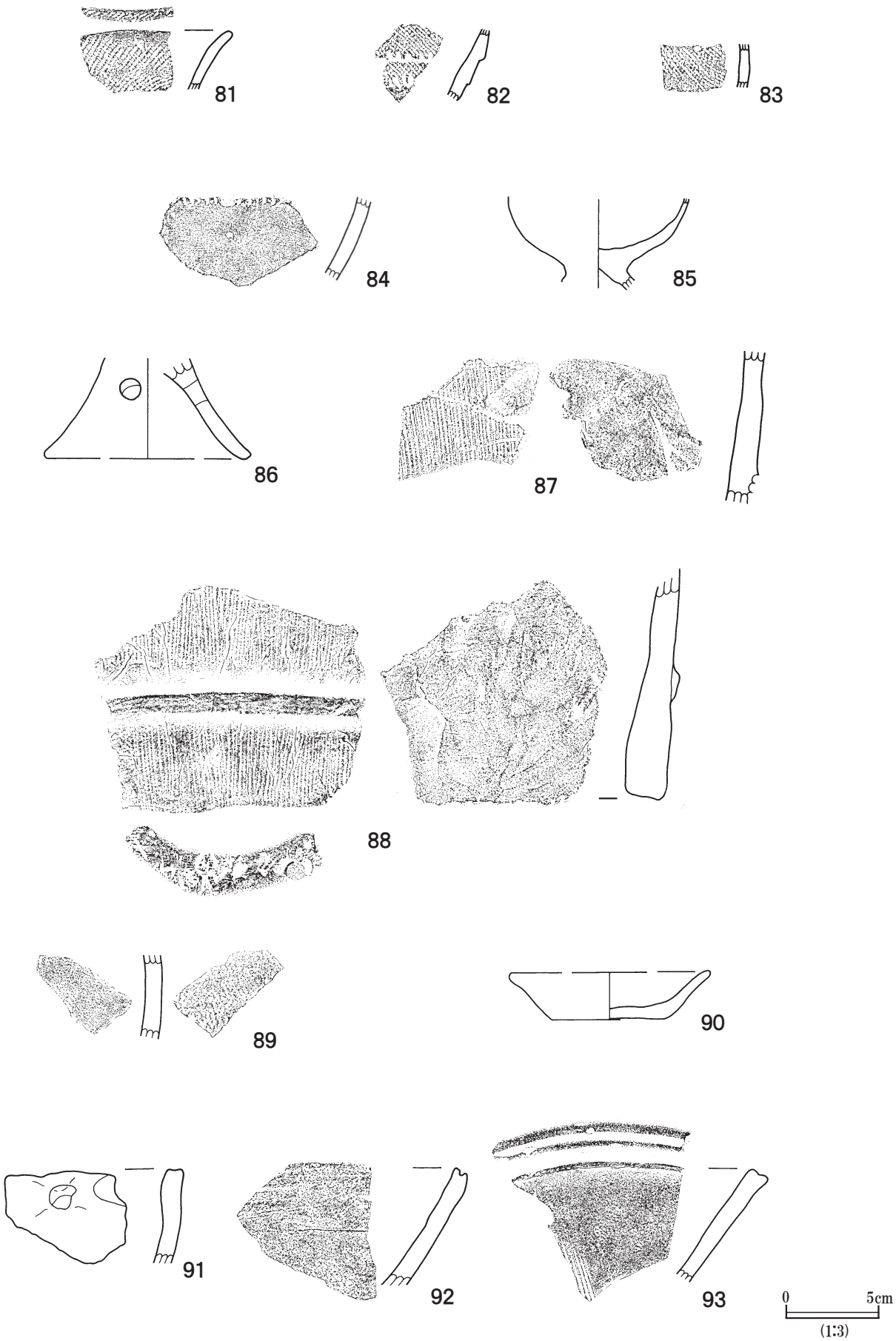
調査区東側から出土。他に須恵器は出土しなかった。

（５）土師質土器　（第16図、第８表、90）

かわらけ。調査区中央から出土。古代～中世にかけての所産と考えられる。

（６）　在地糸土器（第16図、第８表、91～93）

調査区中央～東側にかけて出土。91は、内耳部分欠損。擂鉢の口縁端部には、沈線がめぐる。93は、４本の摺目が確認できる。



第１６図　遺構外出土弥生時代以降土器実測図

第8表　遺構外出土弥生時代以降遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色 調	胎 土	焼成	文様・調整等の特徴	備 考
81	弥生	口径 － 器高 － 底径 －	口縁部片	淡黒褐色	雲母微	良	外面　単節LR。 内面　横ナデ。	弥生後期 1M一括
82	弥生	口径 － 器高 － 底径 －	口縁部片	燈褐色	長石微	良	外面　折り返し口縁、端部に刻み目。 附加条1種が地文。 内面　ナデ。	弥生後期 塚一括
83	弥生	口径 － 器高 － 底径 －	胴部片	淡黒褐色	長石少	良	外面　附加条が地文。 内面　横ナデ。	弥生後期 1M一括
84	土師器 甕	口径 － 器高 － 底径 －	胴部片	燈褐色	雲母微	普	頸部屈曲部刻み目。 外面　横位ハケ目 内面　ハケ目	古墳 前期 1P一括
85	土師器 小型器台	口径 － 器高 － 底径 －	胴部片	内外面 燈褐色	雲母少 長石少	悪	外面　縦横ヘラケズリ。 内面　著しく落剥。	古墳前期 調査区一括
86	土師器 器台	底径　11.0 器高 (5.3)	脚部	燈褐色	長石少	良	外面　下端ヘラミガキ。 内面　下端ヘラケズリ。	古墳前期 塚一括
87	埴輪 円筒埴輪	口径 － 器高 － 底径 －	胴部片	褐色	長石多	普	外面　ハケ目。 内面　ナデ。	古墳後期 塚一括
88	埴輪 円筒埴輪	口径 － 器高 － 底径 －	小片	褐色	長石多	普	外面 突帯付近縦位のハケ目。 胴部に三角形の突帯がめぐる。 内面　ナデ。	古墳後期 1M一括
89	須恵器	口径 － 器高 － 底径 －	胴部片	青灰色	長石多	堅緻	外面　タタキ目。 内面　ナデ。	新冶産 Eトレンチ
90	かわらけ	口径 10.5 器高　6.0 底径　2.5	2/3	淡燈褐色	赤色スコリア微 金雲母微	普	外面　口縁横ナデ　底部右の回転糸きり。 内面　口縁横ナデ。	中世 1M一括
91	内耳土鍋	口径 － 器高 － 底径 －	口縁部片	外面 黒褐色 内面 灰褐色	長石少　雲母少	良	外面　ナデ。 内面　横ナデ。	在地糸 1P一括
92	擂鉢	口径 － 器高 － 底径 －	口縁部片	外面 灰色 内面 灰白色	長石微	良	口唇部明確な沈線強い、外面に煤が付着。 外面　横ナデ。 内面　工具によるナデ。	在地糸 Eトレンチ
93	擂鉢	口径 － 器高 － 底径 －	口縁部片	外面 燈褐色 内面 黒色	雲母微 長石微	良	口唇部に弱い沈線。 外面　ナデ。 内面　摺目が施される。	在地糸 Eトレンチ

第３章　成果と課題

おおびた遺跡ｂ地点の調査では、土坑２基、竪穴住居跡１軒、土坑墓１基、堀・土塁が検出された。また、遺構外からは、縄文時代から中世のまでの土器が出土した。

第１節　おおびた遺跡ｂ地点の成果

縄文時代

１号土坑は、隅丸長方形で底面が平坦なしっかりとした掘り込みを持つ土坑である。縄文時代の土坑の中では特徴的な平面形を有する。２号土坑は、１／２の検出だが不正円形でしっかりとした掘り込みを１号土坑同様に持つ。遺構は重複せず検出されたことから、前後関係は不明だが、どちらかを意識して上で後の土坑を機能させ空間を利用していた状況は想定できる。２基とも平面形態は異なるが、出土遺物などから阿玉台１ｂ期の土坑墓として想定する。

遺構外では、中期阿玉台式期が中心となり、早期・前期・後期の土器、土製品、石器が認められる。

早期は、野島～鵜ヶ島台期にかけての土器が確認できる。施される文様は、細かく浅い条痕が特徴であり、文様構成の変遷が追える資料が得られた。

前期は、末葉に相当する粟島台式土器が検出された。千葉県銚子市粟島台遺跡を標識遺跡とするもので、おもに東関東に分布し、地文の縄文をすり消して結節縄文を胴部に施す。市内では、二重堀遺跡で良好な資料が出土しており[(3)]、土器の内面にヘラミガキを施している点が観察できる。

中期は、初頭の五領ヶ台式、前半の阿玉台式・勝坂式期の土器を検出した。五領ヶ台式は市内の遺跡では客体的に出土する傾向にあり、本遺跡でも小破片の出土であった。調査区全般から出土した阿玉台Ｉｂ式土器は、突出する出土量を考慮するならば、１号土坑、２号土坑以外にも住居等の遺構が周辺に存在している可能性は高い。勝坂式土器は、遺構からの出土ではないものの、阿玉台Ｉｂ式に共伴する個体と考えたい。

後期は、前半の堀之内１式期の古相の土器が客体的に出土した。

土製品は、土器片錘・土製円盤が９点出土。側面を調整する個体と調整しない個体に分類できる。佐倉市吉見稲荷山遺跡では、加曽利Ｅ２式の１軒の住居跡から290点あまりの土器片錘が出土している。集中して土器片錘が出土した例として挙げることができ個体重量や廃棄状況について言及している[(4)]。

石器は３点出土。他にも黒曜石が６点出土している。80は、長軸方向にちょうど半分に割れて、手のひらに収まる大きさである。被熱した痕跡が認められた。黒曜石は住居覆土（４点）・堀覆土（１点）・排土一括（１点）から出土し、調査区中央に集中する。原産地までの分析には至らなかった。

弥生時代

少破片の出土を見るだけとなった。胴部に附加条・単節斜縄文が施される甕の一部である。

古墳時代

１号住居跡は、堀・土塁に覆土を削平されながら全体の１／２を検出。不規則な配置の柱穴を避け、住居跡中央部分に３個体の甕が集中して出土した。遺構外出土の土師器と併せ、平底甕・台付甕・小型器台・高坏の組成が確認できる。平底甕の頸部は、「く」の字状に屈曲し、口縁部は素縁である。甕は、古墳時代開始期の土器をまとめている髙花氏編年のケズリ調整甕が登場するⅢｂ期に相当し[(5)]、比田井氏編年Ⅱ期[(6)]、草刈編年Ⅲ期[(7)]に併行する。遺物の出土状況が近似している遺構は、市域では権現後遺跡Ｄ170が例として挙げられる[(8)]。Ｄ170は、3.5×3.0ｍを測る隅丸長方形の焼失住居跡である。

柱穴は認められず、貯蔵穴とされるピットが住居内南東に検出されている。出土遺物は、台付甕・平底甕・器台・壺・鉢の組成が確認され、床面直上の炉を中心とした部分に集中している。２次的な被熱が胴部に認められる出土遺物があり、３の平底甕口縁部は刻み目がなく頸部は、「く」の字状に屈曲する。D170は髙花氏編年のⅢａ期に該当するが遺構形態は簡略な印象を与える。

特殊な遺物が集中して住居内に出土する遺構の例は、四街道市権現堂遺跡の75号住が挙げられる[9]。住居は、6.1×5.7mの規模をもち隅丸方形の平面形態である。75号住では、床面直上から異形器台３個体、口唇部に刻み目のあるハケ目調整平底甕が１個体出土している。75号住は焼失住居であり、異形器台は、炉と北東柱穴の間に集中し、甕は南東柱穴から検出され髙花氏編年のⅡ期に比定できる。おおびた遺跡ｂ地点の１号住に比べ、権現堂遺跡のD170は大型住居であるが出土した遺物は、単純な組成であり生活以外の目的を持つことを示唆している。

関東地方を主に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての期間、住居跡床面直上出土の小型壺について比田井氏は検討を加えている。住居跡コーナー部分から集中して小型壺は出土し、小型壺は神人共食の役割を担っていたと類推している。小型壺は屋内祭祀儀礼に関わる器種であり、長期間存続する器種ではない。屋内祭祀儀礼は小型壺の出現とともに生じ消滅とともに消え去り、当該期集落内の「紐帯維持･強化」の役割を果たしたと想定している[10]。炉の周辺や住居隅の土坑近辺に台付甕、平底甕、高坏、小型器台、異形器台、鉢、坩などが集中して出土する傾向は、恐らく比田井氏の推論を援用することができる。印旛沼周辺でも、古墳時代前期の時間幅の中で小型壺以外の消長する器種が選択され、その土器が「紐帯」に関わる屋内祭祀儀礼に用いられていた可能性は強い。

遺構外からは円筒埴輪片が出土した。市域で円筒埴輪が出土した古墳は、桑納２号墳であり、形象埴輪も確認されている[11]。桑納２号墳の円筒埴輪は、突帯部の断面が三角形であり、おおびた遺跡ｂ地点の円筒埴輪突帯部も同様である。突帯部を比較すると、桑納２号墳よりおおびた遺跡ｂ地点の円筒埴輪はやや後出的であろう。おおびた遺跡ｂ地点出土の円筒埴輪は、ａ地点で検出されたおおびた１号墳（仮称）に伴う埴輪であり古墳造営の時期は古墳時代後期に比定できようか。

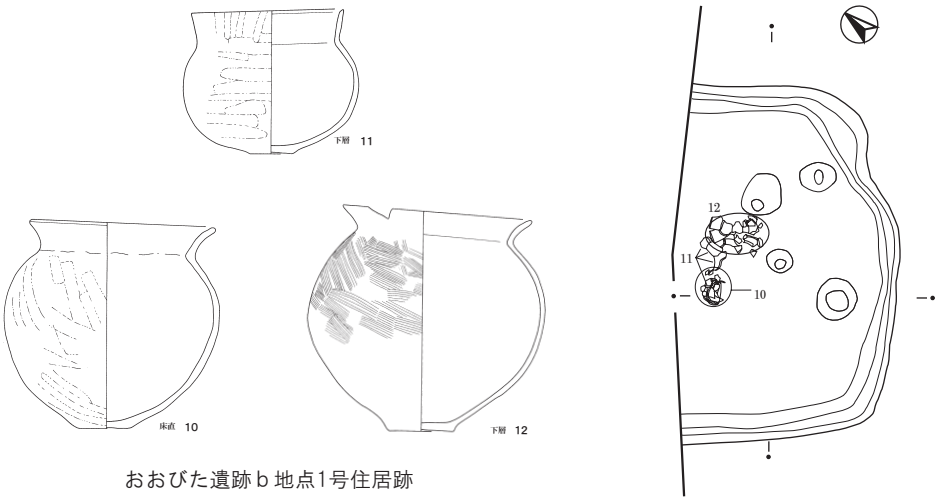
奈良・平安時代

須恵器大甕の小破片が出土。遺構は、上面より底面がＬ字にオーバーハングする土坑墓を検出した。間見穴遺跡003号墳が土坑墓の近似する調査例として参照できる。間見穴003号墳は、全長18mをはかるほぼ正円形の円墳で３基の埋葬施設が認められた。第３埋葬施設が土坑墓であり、周溝が埋没した後、古墳裾部を選び、裾部に沿うように長軸を配し設けられている。遺物の出土は認められなかったが、古墳群周辺が葬祭等の空間として利用される[12]。ｂ地点でも、おおびた１号墳に近接する距離で土坑墓を検出し間見穴遺跡と同様の状況が看取できる。

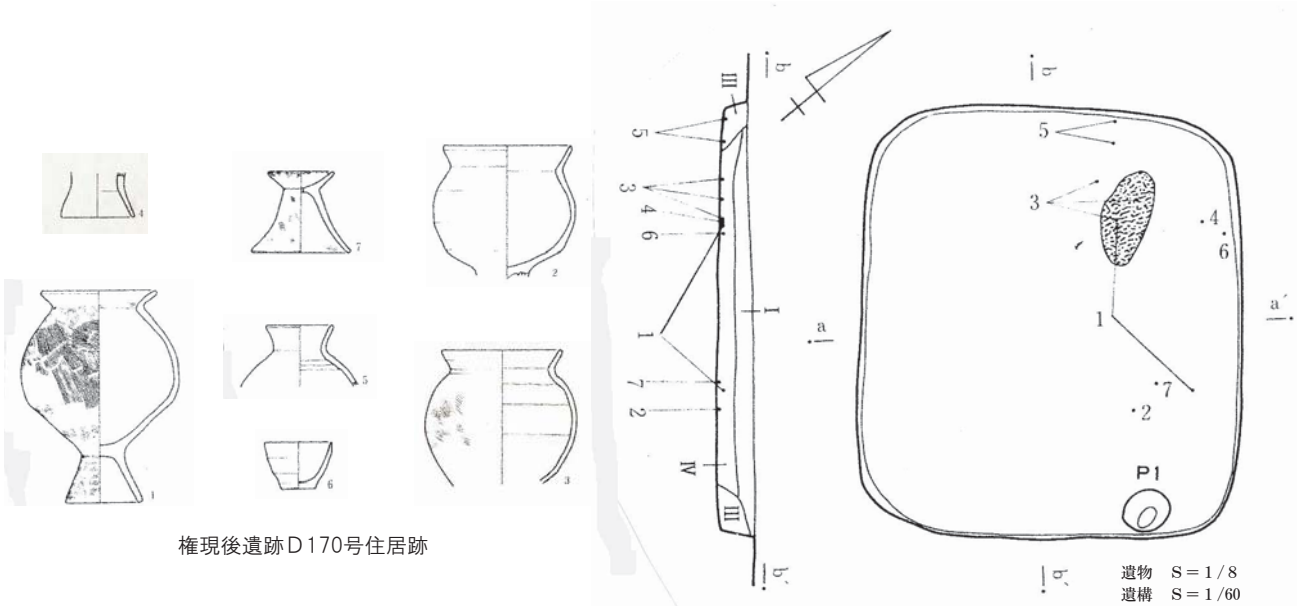
中世

北東に伸びる高い段丘面の先端を区画する堀と土塁を検出した。部分的な確認であるが、崖線に直行し区画された平坦面を作り出す遺構である。遺構外から日常生活用品であるかわらけ・内耳土鍋・擂鉢が出土し、いずれも在地系であった。

おおびた遺跡の立地する保品支台南東端には保品竜害城跡の土塁が残存している。「ゆうがい」「ゆうげ」「用替」「竜崖」「領替」は『要害』が転訛した用語であり、名称が伝わる地形がかつて要害であったことを意味している。保品竜害城跡の土塁は印旛沼に面する東に向かって機能し､「りゅうげ(竜害)」の地名が伝わることからある程度の恒常的な施設の存在が推測できる[13]。保品支台の南、東西に細長く伸びる台地の崖線中央に先崎城跡が位置する。佐倉市先崎字領替に所在し、中世の宝篋印塔のある宝珠院や鷲神社に近接している。先崎城跡の西端部で土塁２条、溝状遺構２条を検出し、先崎城の改造・

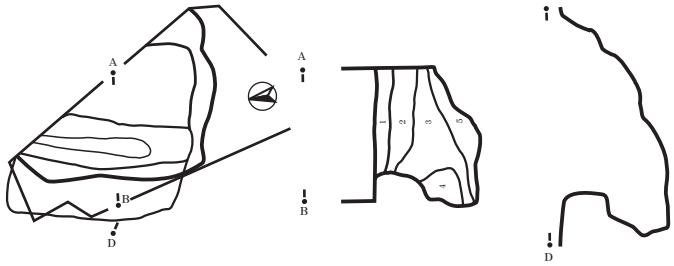


おおびた遺跡ｂ地点1号住居跡

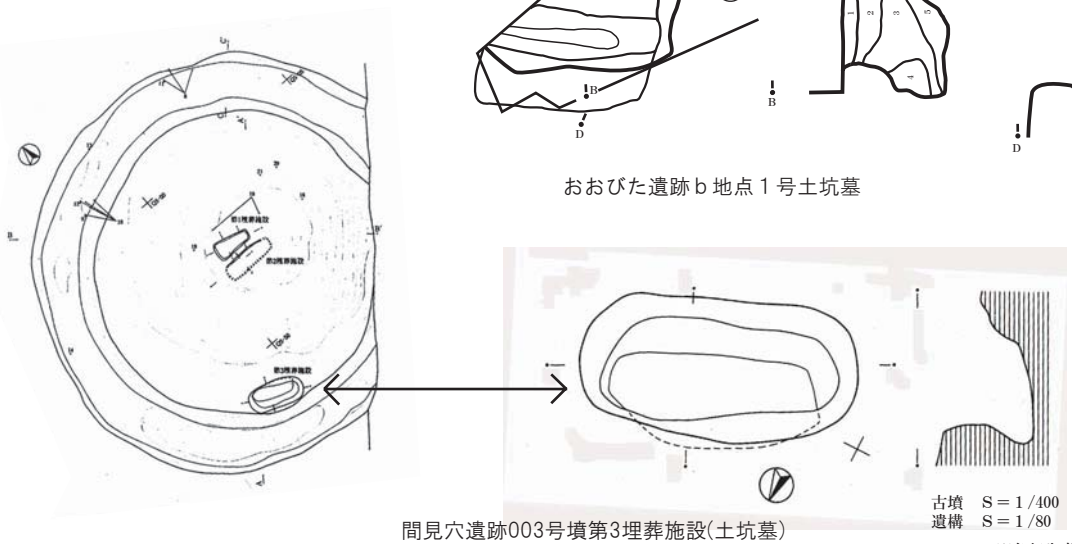


権現後遺跡Ｄ170号住居跡

第１７図　古墳時代前期住居跡出土遺物図



おおびた遺跡ｂ地点１号土坑墓



間見穴遺跡003号墳第3埋葬施設(土坑墓)

※各報告書から加筆・修正のうえ転載

第１８図　奈良・平安時代土坑墓実測図

拡大の最終形態の一部が明らかとなった[14]。先崎城跡から西へ500m、おおびた遺跡から南へ1000mの地点に下高野館跡がある。下高野館跡は、南東に向かって突き出た舌状台地の台地端に土塁が残っている一画を想定しており、館跡の北西には天満宮が祀られている[15]。おおびた遺跡北方対岸には、松崎Ⅲ遺跡が所在する。およそ方半町の広さで台地平坦面を土塁と溝で区画し、区画内に土坑・地下式坑・掘立柱建物・柵列・火葬墓などを検出し13世紀～15世紀まで営まれた居館跡と推測されている[16]。隣接する地点では、火葬墓を中心とした墓域が営まれ、あるいは中世寺院とその墓域であるかもしれない。

前述の各遺跡の状況を考えあわせるなら、ｂ地点の最高位面で平坦な郭を構成し、その郭を中心として保品竜崖城跡の土塁を外郭とするような施設が存在していたと想定できる。

第２節　おおびた遺跡の概略

限られた調査範囲のため遺跡の全容を明らかとするものではないが、ａ地点の調査成果、周辺の調査事例を併せおおびた遺跡の概略を述べたい。

＜縄文時代＞

ａ地点（炉穴１基･土坑１基）、ｂ地点（土坑墓２基）で遺構を検出した。両地点からは、早期･前期･中期・後期の土器が出土した。土器は早期野島式・鵜ヶ島台式・茅山下層式と中期阿玉台期を中心とし調査範囲全般から出土し、遺構は標高約21mの上位段丘面において検出した。縄文時代の早期から前期にかけて、遺構の分布状況は標高に強く影響される指摘[17]がされており、ほかの時期についても遺跡の立地を含め土地利用の状況を考える必要がある。

＜弥生後期～古墳時代前期＞

市内では、弥生後期から、古墳時代前期に連続する遺跡は数多い。周辺でも栗谷遺跡・道地遺跡・松崎遺跡・井戸向遺跡・権現後遺跡・ヲサル山遺跡・川崎山遺跡などで数十軒単位の住居跡を検出している。おおびた遺跡では、弥生時代後期１軒（６号住居)、古墳時代前期７軒が調査され弥生後期と古墳前期の間に、何世代かの隔たりがある。ａ地点の１・２・３・４・５・７号住居は髙花氏編年Ⅲ期を中心とした時期に当てはまり、検出した遺構は、大型の住居跡と小型の住居跡に分かれる。西の谷を挟んだ対岸の台地に立地する栗谷遺跡では、大型住居跡１軒に対して、小型住居跡数軒が単位として成立する可能性にふれ[18]、調査範囲外の高位・低位の段丘面にも弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は分布する見通しが成り立つ。

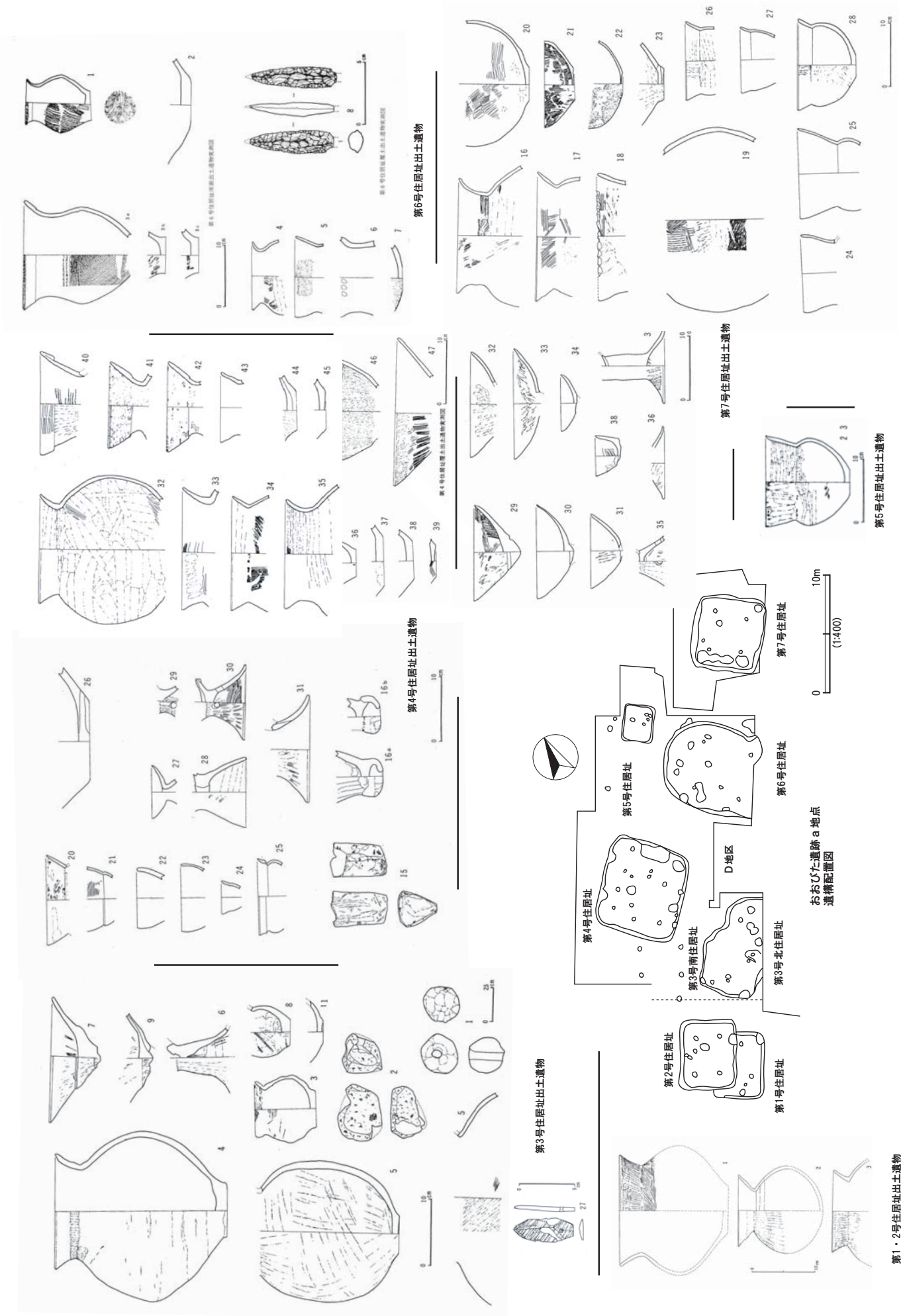
次に、住居から出土した土器について述べる。古墳時代前期の土器に対して、従来の「斉一性」だけでは捉えられない様相を菊池氏は簡潔に規定している。以下長文だが引用する。「弥生時代後期には、各地に固有な土器群が成立し、その系統を引く土器群に、頻繁な土器の移動・交流を背景とした外来的な土器群が加わり、組成・技法等の上で地域的特徴を持って盛衰し、やがて汎日本的と言える土器群に再編・統一されていく[19]。」髙花氏は、時代区分論には言及せず、現象として小型精製土器群の定着する時期から古墳時代中期的な土器様相が成立する直前までを「古墳時代開始期」の土器と呼称している[20]。認められる器種は、甕・壺・高坏・器台・異形器台・小型丸底壺・大型坩・甑・鉢・椀などがある。また井戸向遺跡の報文では、①甕型土器か壺型土器のどちらかが主体的な出土をする。②甕形土器は平底なのか台付なのか。③台付甕形土器は器台形土器と共伴するのか。④壺形土器が弥生的な要素を色濃く残すのか。出土した土器の傾向を４項目で分析し、権現後遺跡、ヲサル山遺跡との様相の違いを検討し、４項目は、単純な時間軸の問題ではなく、空間的な視点を加えて再検討が必要であると述べている[21]。以上を概観した上で、おおびた遺跡の土器を検討すると、ケズリ調整の平底甕が主体となり、台付甕型土器と器台形土器の共伴がみられ、壺形土器は認められない。高坏の坏部のみの出土が多く、脚部とは接合しない。坩が認められるなどの特徴が見出される。

＜奈良・平安時代＞

遺跡が墓域として機能していた状況が復元できる。奈良・平安時代には、火葬墓、方形周溝状遺構、底部がオーバーハングする土坑墓（有天井土坑）、円形・長方形の土坑墓などの埋葬形態がある。遺構の占地状況も、集落の周縁に位置する場合と集落から距離を置き古墳などを二次利用する場合に分かれる。遺物はほとんど出土せず、ｂ地点の土坑墓に関しても遺物は認められなかった。市域で底部がＬ字にオーバーハングする土坑墓は、間見穴遺跡・井戸向遺跡・役山東遺跡・向境遺跡で検出されている。佐倉市栗野Ｉ遺跡では、62基の土坑墓が検出され３類に分類されている。Ａ類．副葬されている遺物の内容は古墳の埋葬施設と変わらない。Ｂ類．２段に掘り込み底面に溝がある。Ｃ類．地下式の土坑墓である。Ｃ類が土坑の底部をＬ字に掘り込む形状で最も多く55基確認された。栗野遺跡の調査は、土坑墓群が大きく２群に分けられ、数基のまとまりをもち、重複しているものはない結果が得られた[22]。市域の調査例も単独でオーバーハングする土坑墓が検出されるのか、平面形態が円形・長方形の土坑墓とセット関係があるのか、今後の検討する課題として残る。

以上、成果を踏まえた上で気付いた問題点を列挙した。保品支台に立地する遺跡は、これまで調査事例が少なかった。しかしおおびた遺跡の調査成果は、保品支台に立地する遺跡の様相を知る手がかりとなる。今回の調査・報告等に際して多くの方々から御指導・御援助を頂いたことを深く感謝いたします。

［引用参考文献］
（１）増田誠三他　1975『おおびた遺跡　―八千代市少年自然の家建設設置内遺跡―』おおびた遺跡調査団
（２）篠原　正他　1978『千葉県印旛郡富里村　新橋遺跡発掘調査報告』富里村村史編纂委員会
（３）小川和博・大渕淳志　2007『二重堀遺跡　新林遺跡』八千代市二重堀・新林遺跡調査会
（４）小倉和重　2002『千葉県佐倉市　吉見稲荷山遺跡（第５次）』（財）印旛郡市文化財センター
（５）髙花宏行　2001「印旛地域における古墳時代開始期の土器様相」『研究紀要２』（財）印旛郡市文化財センター
（６）比田井克仁　1995「下総地域の主体性」『法政考古学』第21集　法政考古学会
（７）加藤修司　2000「第１章　土器編年案」『研究紀要21』（財）千葉県文化財センター
（８）加藤修司他　1984「第Ⅲ部　弥生時代」『八千代市　権現後遺跡』（財）千葉県文化財センター
（９）髙橋誠他　2004『千葉県四街道市　権現堂遺跡』（財）印旛郡市文化財センター
(10) 比田井克人　2001「第５章　関東在地の内的対応」『関東における古墳出現期の変革』雄山閣出版
(11) 加藤修司　2008「第２編第４章」『八千代市の歴史　通史編　上』八千代市史編纂委員会
(12) 田中　裕他　2004『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書３　－八千代市間見穴遺跡－』（財）千葉県文化財センター
(13) 道上　文　2008「第３編第７章」『八千代市の歴史　通史編　上』八千代市史編纂委員会
(14) 髙谷英一　2006『千葉県佐倉市　先崎城跡』（財）印旛郡市文化財センター
(15) 前掲註（13）に同じ
(16) 岡田誠造他　2006『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書４－松崎Ⅲ遺跡－』（財）千葉県教育振興財団
(17) 中野修秀他　2008「第３章　成果と課題」『千葉県八千代市　内野南遺跡ｄ地点発掘調査報告書』八千代市教育委員会
(18) 宮澤久史他　2003「第３章　第４節」『千葉県八千代市　栗谷遺跡　－第２分冊－』八千代市教育委員会
(19) 菊池健一　1999『千葉市戸張作遺跡Ⅱ』（財）千葉市文化財調査協会
(20) 前掲註（５）に同じ
(21) 藤岡孝司他　1987「第４章まとめ」『八千代市井戸向遺跡』（財）千葉県文化財センター
(22) 山口典子他　1991「第３章第２節」『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡　－佐倉第３工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ―』（財）千葉県文化財センター

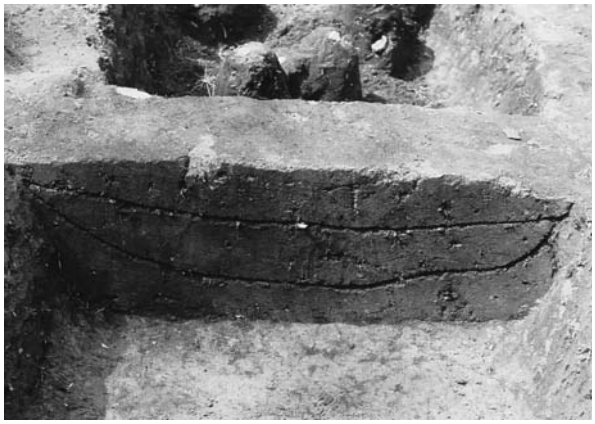


第１９図　おおびた遺跡ａ地点出土遺物図

遺跡遠景（北東から）

１号土坑

２号土坑



１号土坑セクション

１・２号土坑完掘状況

写真図版２

堀・土塁

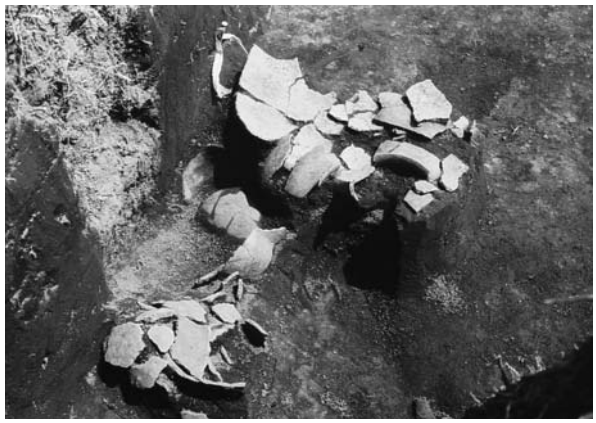
１号土坑墓セクション

１号土坑墓

土塁

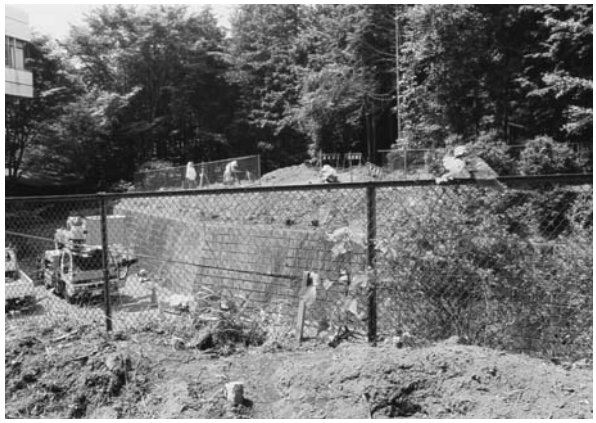
堀

１号住居跡



遺物出土状況左下 11、右上 12

遺物出土状況 10



調査風景

１号住居跡出土甕（左から11、10、12）

写真図版４

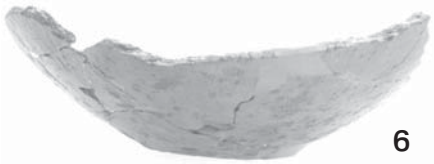
1

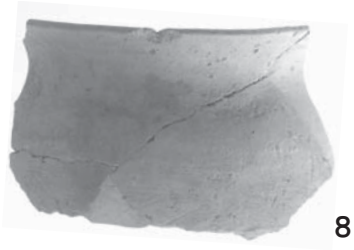
2

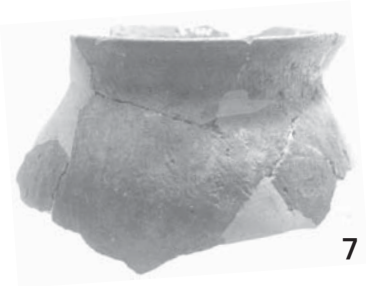
3

4

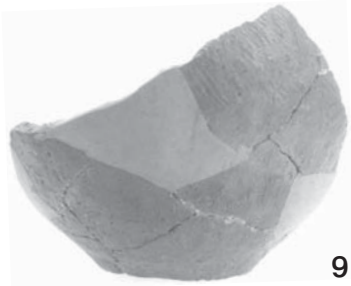
5


6


8


7

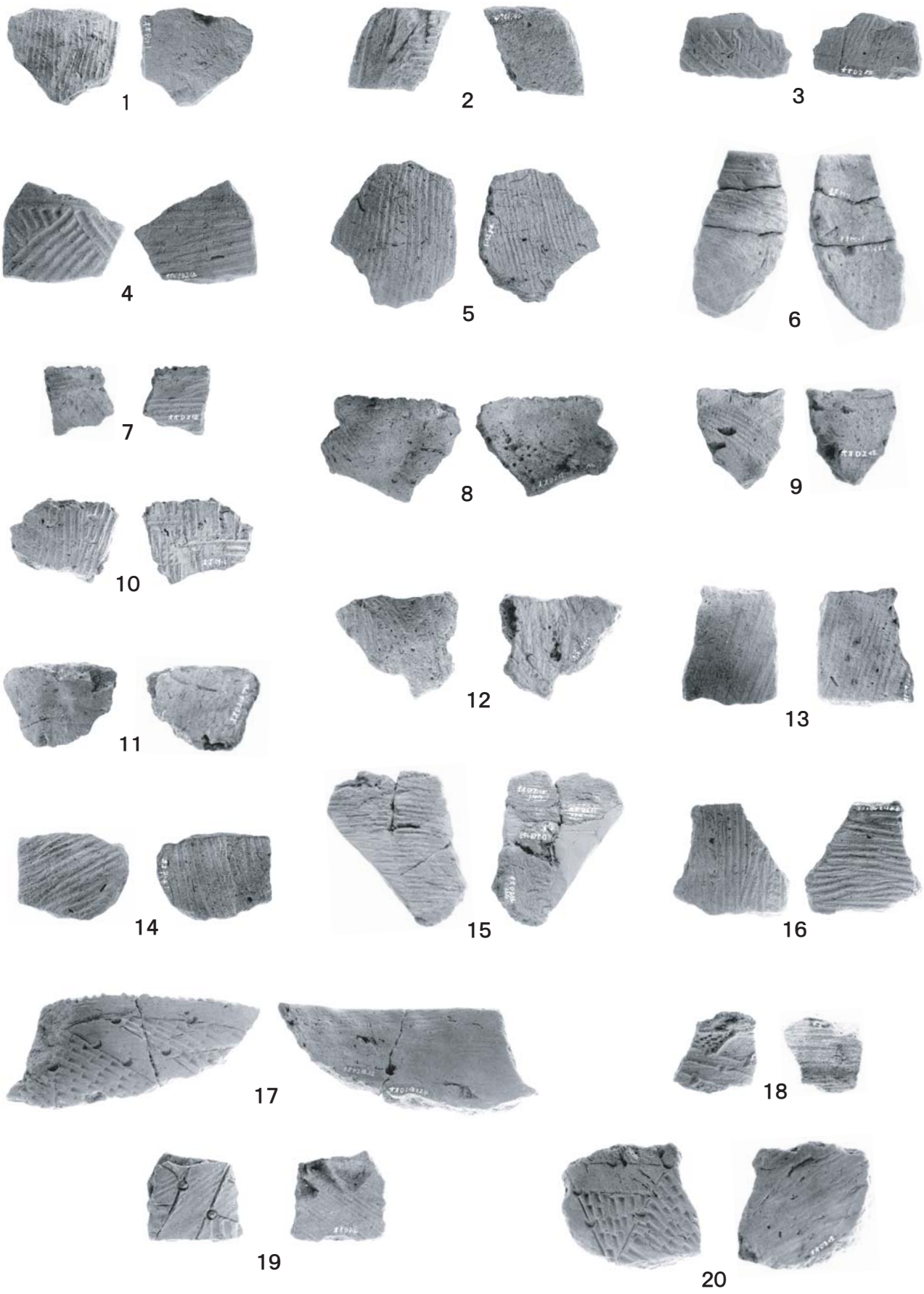
10


9

11

12

1号住跡出土遺物



遺構外出土縄文時代遺物

写真図版６

21

22

23

24

25

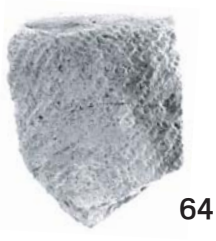
26

27

28

29

63


64

65

66

67

68

黒曜石一括

遺構外出土縄文時代遺物

81

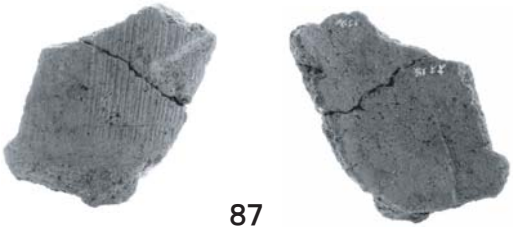
82

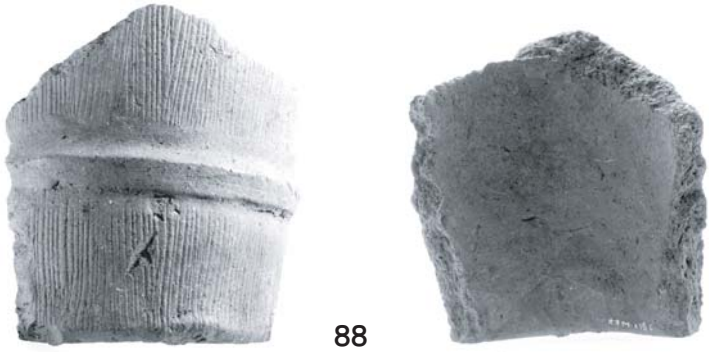
83

84

85

86


87


88

89

90

91

92

93

遺構外出土弥生時代以降遺物

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	ちばけんやちよし　おおびたいせきびーちてん
書　　名	千葉県八千代市　おおびた遺跡ｂ地点
編　集　者　名	伊藤 弘一・宮澤 久史
編　集　機　関	八千代市教育委員会
所　　在　　地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-２　　TEL.047（481）0304
発 行 年 月 日	西暦　2009年　（平成21年）　３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白筋遺跡ｂ地点	八千代市保品字須賀1061－１外（やちよしほしなあざすが）	12221	86	35度 45分 36秒	140度 ８分 34秒	19950710 ～ 19950807	435㎡	八千代市少年自然の家増築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おおびた遺跡 ｂ地点	集落跡	縄文時代	土坑　２基	縄文土器、石器	
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡　１軒	古墳時代土師器	
	墓域	奈良・平安時代	土坑墓　１基		
	城館跡	中世	堀　１条 土塁　１条	土師質土器	

要　　約	おおびた遺跡ｂ地点本調査の発掘調査報告書で、八千代市少年自然の家増築工事に伴い、公共事業関連調査として八千代市が直営調査として実施した。 おおびた遺跡は八千代市北東部に所在し、印旛沼に流れ込む新川、神崎川の合流地点を西に臨む台地に立地する。台地は段丘状地形を呈し、今回のｂ地点は、その上位段丘面に位置する。 検出した遺構は縄文時代･土坑２基、古墳時代・竪穴住居跡１軒、奈良平安時代・土坑墓１基、中世堀１条、土塁１条。 縄文時代土坑は土坑墓としての性格が考えられる。古墳時代住居跡は全体の１/２の検出。奈良・平安時代の土坑墓は古墳に近接する位置に構築され、遺跡が古墳時代から奈良・平安時代にかけての墓域として機能していたことが判明した。中世の堀・土塁は、台地先端の平坦面を区画するために構築された。 遺構外からは、縄文時代早期、前期、中期、後期の土器、縄文時代石器、弥生土器、土師器、円筒埴輪、須恵器、土師質土器が出土。中期阿玉台式期の土器が最も多く出土し、早期条痕文期の土器が次いで多かった。市域でこれまで出土例の少なかった円筒埴輪片が出土した。住居跡からは、古墳時代前期の甕３個体が床面付近から集中して出土し特徴ある傾向を示す。

千葉県八千代市
おおびた遺跡ｂ地点
－公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ－
2009（平成21年）

発行日　2009年３月31日
編集　八千代市教育委員会
〒276-0045　八千代市大和田138-２
TEL.047-481-0304
発行　八千代市教育委員会